[資料・批評]

2014年アート・クリティック活動の報告

演劇研究グループ
編集委員：酒井正志、安藤隆之、玉崎紀子、服部厚子

はじめに

演劇研究グループが開催している「アート・クリティック」の活動報告をお届けする。2010年から始めたこの報告は今年で5年目を迎えた。

演劇研究グループは今年度から「21世紀のリージョナル・シアターと近代演劇」をテーマに新たな研究活動を開始した。研究の基礎的な作業となるのは、実際の上演を観て、批評することである。今年も、名古屋を中心に、東京・滋賀・浜松にまで足を運んで、演劇・オペラ・ミュージカル・歌舞伎・文楽などの上演を鑑賞し、研究所で開いたアート・クリティックの研究会で批評を語り合った。取り上げた作品は128作品だが、そのうち7作品については、「観劇短評選」としてここに掲載した。また、4人の所員・準所員がロンドン、ストラットフォード・アポン・エイボン、ニューヨーク、ローマでの演劇・ミュージカル・オペラの踏査を行った。鑑賞した作品は42作品に上る。この踏査についても、3つの批評を掲載した。さらに、今年度の研究テーマに基づく研究成果の一部として、論考「21世紀のリージョナル・シアター ― 創造・発信・手をつなぐ公共劇場」を掲載した。研究テーマ「21世紀のリージョナル・シアターと近代演劇」に取り掛かってまだ1年だが、今後とも研究を掘り下げていきたい。

(酒井正志　記)

Ⅰ．2014 年アートクリティック活動の報告

アート・クリティック 2014 年に報告された観劇演目のリストにほぼ日付順に通し番号をつけて以下に記載する。

①ミュージカル『モンテクリスト伯』(東宝　石丸幹二主演)　2014 年 1 月 11 日㈯　14：00～　愛知県芸術劇場・大ホール　(玉崎紫・玉崎)

②コンサート『びわ湖ホール 4 大テノール・初笑いコンサート』　1 月 5 日㈰　14：00～　岐阜市サラマンカホール　(塹江)

③MET ライブ・ビューイング・オペラ『ファルスタッフ』(ヴェルディ)　1 月 11 日㈯～1 月 17 日㈮　10：00～　(伊藤（1/13)・塹江（1/15))

④演劇『真夏の夜の夢』(野田秀樹脚本・宮城聡脚色　SPAC)　1 月 26 日㈰　14：00～　静岡県立芸術劇場　(服部)

⑤音楽劇『わが町』(俳優座)　1 月 28 日㈫　18：30～　四日市市文化会館第一ホール（四日市演劇鑑賞会)、1 月 29 日㈬　18：30～　日本特殊陶業市民会館ビレッジホール　(服部（1/28)・玉崎・磯貝（1/29 名演・名古屋)・伊藤（1/30))

⑥コンサート『高橋薫子ソプラノリサイタル』　2 月 7 日㈮　18：30～　名古屋市芸術創造センター　(服部)

⑦宝塚・オリジナル・ミュージカル『ロバート・キャバ　魂の記録』＆レヴュー『シトラスの風Ⅱ』(宝塚宙組公演)　2 月 8 日㈯　13：00～　中日劇場　(磯貝)

⑧オペラ『ホフマン物語』(大勝秀也指揮・中村敬一演出)　2 月 9 日㈯　14：00～　びわ湖ホール（服部)

⑨演劇『お気に召すまま』(文学座公演)　2 月 10 日㈯　夜　あうるすぽっと　(服部)

⑩演劇『尺には尺を』(文学座公演)　2 月 13 日㈭　13：30～　あうるすぽっと　(伊藤・服部)

⑪演劇『発明王子と発明彼女』(あおきりみかん)　2 月 15 日㈯　19：00～　愛知県芸術劇場・小ホー

ル　(服部)

⑫ミュージカル『シャーロックホームズ』(韓国作品　板垣恭一演出・一路真輝主演) 2月13日㈭ 18：30～　愛知県芸術劇場・大ホール

(玉崎紫)

⑬演劇『太鼓たたいて笛ふいて』(こまつ座　大竹しのぶ主演)　2月15日㈯　13：30～　・　2月16日㈰　12：30～　名鉄ホール　(服部 (2/15)・伊藤 (2/16))

⑭ Theatrical Music Grand Gala Concert『時間旅行』(オペレッタ＆ミュージカル・ハイライト　名古屋市文化振興事業団2014年企画公演・事業団設立30周年記念事業)　2月21日㈮～2月23日㈰　16：00～　ナディアパーク・アートピア　(磯貝・服部 (2/22))

⑮コンサート『イル・ディーヴォ』(指揮・ドラムスは外国人。オーケストラは日本人)　2月28日㈮　19：00～　愛知県体育館　(磯貝)

⑯新作能『紅天女』(美内すずえ原作「ガラスの仮面」から) & after talk　3月2日㈯　18：00～　名古屋能楽堂　(磯貝・酒井)

⑰オペラ『椿姫』(藤原歌劇団)　3月2日㈯　17：00～　豊田市コンサートホール　(玉崎)

⑱ METライブ・ビューイング・オペラ『ルサルカ』(ドヴォルザーク)　3月4日㈪　10：00～

(塹江)

⑲オペラ『死の都』(沼尻竜指揮・砂川涼子主演)　3月8日㈯　14：00～　びわ湖ホール

(服部・塹江)

⑳オペラ『奥様女中』(レクチャー＆オペラブッファ公演・宮松重紀指揮・高橋薫子主演・中部フィル)　3月9日㈰　14：00～　小牧市東部市民センター　(服部)

㉑演劇『ムサシ　ロンドン・NYバージョン』(蜷川幸雄演出)　3月13日㈭　18：30～　シアターコクーン　(玉崎紫)

㉒スーパー歌舞伎Ⅱ『空ヲ刻ム者 ── 若き仏師の物語』　3月14日㈮　11：00～　新橋演舞場

(玉崎紫)

㉓演劇『神なき国の騎士 ── あるいは、何がドン・キホーテにそうさせたのか』(野村萬斎演出・主演)　3 月 16 日㈰　14：00～　世田谷パブリックシアター　(玉崎紫)

㉔オペラ漫遊記『コジ・ファン・トゥッテ』(三重オペラ協会)　3 月 15 日㈯　15：00～　コンサートホールムーシケ　(服部)

㉕オペラ『メリー・ウイドウ』(名古屋二期会)　3 月 15 日㈯ ・ 3 月 16 日㈰　13：00～　名古屋市西文化小劇場　(磯貝 (3/15)・服部・玉崎 (3/16))

㉖宝塚『ベルサイユのばら・オスカルとアンドレ』3 月 15 日㈯　18：00～　日本特殊陶業市民会館フォレストホール　(磯貝・玉崎)

㉗オペラ『フィガロの結婚』(小澤征爾指揮)　3 月 19 日㈬　18：00～　愛知県芸術劇場・大ホール　(磯貝)

㉘オペラ『こうもり』(名音大学生公演)　3 月 24 日㈪　18：00～　名古屋市西文化小劇場　(服部・磯貝)

㉙ミュージカル『ちぬの誓い』(TS ミュージカル・謝珠栄演出)　3 月 23 日㈰　13：00～　東京芸術劇場プレイハウス　(玉崎)

㉚中島啓江コンサート　ヴォリューム 21『夢で逢いましょう』(オペラ『あまんじゃくとうりんこ姫』)　3 月 28 日㈮　14：00～　銀座博品館劇場　(服部)

㉛オペラ『春琴抄』(日本オペラ協会　松本美和子主演)　3 月 28 日㈮　19：00～　新国立劇場中ホール　(服部)

㉜杉本文楽『曽根崎心中―付り観音廻り』(杉本博司構成・演出・美術・映像　桐竹勘十郎主演)　3 月 30 日㈰　13：00～　大阪フェスティヴァルホール　(塹江)

㉝ミュージカル『ダディ・ロング・レッグズ』(井上芳雄・坂本真綾主演)　4 月 4 日㈮・4 月 5 日㈯　12：00～　愛知県芸術劇場・大ホール　(玉崎紫・玉崎)

㉞ミュージカル『わたしがドロシー』　4 月 5 日㈯　11：00～　小劇場 pico　(磯貝)

㉟合唱ミュージカル『赤毛のアン』(日進児童合唱団)　4月6日㈰　14：00～　日進市民会館
(玉崎)

㊱METライブ・ビューイング・オペラ『イーゴリ公』(ボロディン)　4月7日㈪　10：00～　ミッドランドスクエアシネマ　(塹江)

㊲METライブ・ビューイング・オペラ『ウエルテル』(マスネ)　4月14日㈪　10：00～　ミッドランドスクエアシネマ　(塹江・伊藤)

㊳コンサート『J.S.バッハ・マタイ受難曲』(鈴木雅明指揮バッハ・コレギウム・ジャパン)　4月20日㈰　15：00～　愛知県芸術劇場コンサートホール　(橋詰・塹江)

㊴ナショナル・シアター・ライブ・演劇『コリオレイナス』(ジョン・ルーク演出トム・ヒドルストン主演)　4月25日㈰　18：00～　TOHOシネマズ　名古屋ベイシティ　(服部)

㊵演劇『ひかりごけ』(ハラ・プロジェクト)　4月25日㈮　19：00～　七ツ寺共同スタジオ　(塹江)

㊶狂言風オペラ『ドン・ジョヴァンニ』(管弦8重奏版・茂山あきら演出)　4月26日㈯　15：00～　三井住友しらかわホール　(磯貝・玉崎)

㊷演劇『ファウスト第1部』(SPACふじのくに世界演劇祭2014)　4月27日㈰　13：00～　静岡県立芸術劇場　(服部)

㊸演劇『ラッパチーニの娘』(劇団クセックACT)　5月1日㈭～4日㈰　19：30～　愛知県芸術劇場・小ホール　(塹江(5/2)・服部)

㊹ミュージカル『イン・ザ・ハイツ』(TETSUHARU演出　松下優也・Micro主演)　5月4日㈰　13：00～　中日劇場　(玉崎)

㊺『オペラ・コミック』(オペラ集団アマルコルド)　5月10日㈯　15：00～　豊田市コンサートホール　(玉崎)

㊻演劇『私を離さないで』(蜷川幸雄演出・倉持裕脚本)　5月23日㈮　18：30～　・　5/24㈯　12：30～　愛知県芸術劇場・大ホール　(伊藤(5/23)・玉崎・玉崎紫)

㊼狂言ござる乃座 in Nagoya『武悪』&『花折』(野村萬斎)　5 月 25 日㈰　14：00～　名古屋能楽堂　(橋詰)

㊽MET ライブ・ビューイング・オペラ『ラ・ボエーム』(プッチーニ)　5 月 10 日㈯～5 月 16 日㈮　10：00～　ミッドランドスクエア　(塹江（5/12))

㊾MET ライブ・ビューイング・オペラ『コジ・ファン・トゥッテ』(モーツアルト)　5 月 24 日㈯～5 月 30 日㈮　10：00～　(塹江（5/29)・伊藤（5/25)・服部)

㊿オペラの魅力Ⅳ・岡本茂朗主宰「オペラ・ハイライト」　5 月 26 日㈪　18：30～　愛知県芸術劇場コンサートホール　(塹江)

51映画『ブルージャスミン』(ウッディ・アレン監督)　5 月 27 日㈫　ミッドランドスクエアシネマ　(塹江)

52演劇『ハムレット』(劇団東演)　5 月 29 日㈭　18：00～　四日市市文化会館（四日市演劇鑑賞会)　(服部)

53オペラ『シモン・ボッカネグラ』(ムーティ指揮・ローマ歌劇場来日公演)　5 月 31 日㈯　15：00～　東京文化会館大ホール　(塹江)

54オペラ『ナブッコ』(ムーティ指揮・ローマ歌劇場来日公演)　6 月 1 日㈰　15：00～　NHK ホール　(塹江)

55MET ライブ・ビューイング・オペラ『ラ・チェネレントラ』(ロッシーニ)　6 月 2 日㈪　10：00～　ミッドランドスクエアシネマ　(塹江（6/2)・玉崎（9/6）東劇再上映)

56ミュージカル『泣かないで』(音楽座ミュージカル)　6 月 7 日㈯　14：30～　日本特殊陶業市民会館　(玉崎)

57演劇『から騒ぎ』(Much Ado about Nothing, Nameless Theatre)　6 月 6 日㈮～8 日㈰　名古屋市芸創センター　(伊藤（6/8)・服部)

58オペラ『椿姫』(コンサート形式・佐藤美枝子・小山陽二郎)　6 月 15 日㈰　15：00～　宗次ホール　(玉崎)

⑲演劇『イシノマキにいた時』　6月18日㈬　15：00～　千種文化小劇場　(磯貝)

⑳パリ・オペラ座ライブ・ビューイング・オペラ『清教徒』　6月13日㈮～19日㈭　10：00～　TOHOシネマズ　名古屋ベイシティ　(服部)

㉑演劇『6週間のダンスレッスン』(草笛光子主演)　6月21日㈯　13：00～　名鉄ホール　(服部・玉崎)

㉒映画『グランド・ブタペスト・ホテル』伏見ミリオン座　6月6日㈮～　(服部・伊藤・玉崎)

㉓演劇『天国の東側』(あおきりみかん)　6月27日㈮　19：30～　愛知県芸術劇場・小ホール　(服部)

㉔オペラ『カルメン』(カサロヴァ主演・マリボール歌劇場)　6月27日㈮　18：30～　愛知県芸術劇場・大ホール　(酒井・塹江)

㉕宝塚『ベルサイユのバラ』(花組公演)　6月29日㈰　11：00～　中日劇場　(磯貝)

㉖オペラ『フィガロの結婚』(稲葉地オペラ・池山奈都子演出)　6月29日㈰　14：00～　名古屋市東文化小劇場　(玉崎)

㉗演劇『ビッグ・フェラー』(森新太郎演出)　6月29日㈰　14：00～　穂の国とよはし芸術劇場　(服部)

㉘演劇『八月の鯨』(民芸・四日市演劇鑑賞会)　7月3日㈭　18：15～　四日市市文化会館　第2ホール　(服部)

㉙演劇『マクベス』(野村萬斎主演)　7月6日㈰　11：00～　名鉄ホール　(玉崎・橋詰・伊藤・服部・酒井)

㉚オペラ『コジ・ファン・トゥッテ』(佐渡裕プロデュース指揮・ディヴィッド・ニース演出　小川・チュウ組公演)　7月19日㈯　14：00～　兵庫県芸術文化センター大ホール　(服部)

㉛演劇『カウラの班長会議』(燐光群・坂手洋二作・演出)　7月25日㈮　19：00～　ウィル愛知

(伊藤)

⑫演劇『抜け目のない未亡人』(ゴルドーニ原作・三谷幸喜翻案・演出)　7月28日㈪　18：30〜
新国立劇場中劇場　(服部)

⑬演劇『鎌塚氏振り下ろす』(倉持裕作・演出)　7月31日㈭　18：30〜　日本特殊陶業市民会館ビレッジホール　(服部)

⑭演劇『The Twelfth Night（十二夜)』(Oxford大学演劇協会来日公演)　8月3日㈰　14：00〜
東京芸術劇場シアターイースト　(伊藤)

⑮ミュージカル『シスター・アクト・天使にラブソングを』(東宝)　8月3日㈰　13：00〜　愛知県芸術劇場・大ホール　(玉崎)

⑯モダンダンス『睡眠〜Sleep』(勅使河原三郎新作・構成・振付・美術・照明、オーレリー・デュポン他共演)　8月21日㈭　19：00〜　愛知県芸術劇場・大ホール　(塹江)

⑰演劇『暗いところからやってくる』(前川知大作・小川絵梨子演出)　8月23日㈯　11：00〜　春日井市民会館　(服部)

⑱演劇『ハムレット』(こどものためのシェイクスピア・山崎清介演出)　8月30日㈯　18：00〜
[8/31. 14：00〜]　愛知県芸術劇場・小ホール　(塹江（8/30)・橋詰・伊藤・服部（8/31))

⑲映画『消えた絵　クメール・ルージュの真実』(リディ・パニュ監督)　9月4日㈭　今池シネマテーク　(塹江)

⑳あいち国際女性映画祭　9月3日㈬〜9月7日㈰　ウィル愛知　(服部)

㉑ミュージカル『レディ・ベス』(M. クンツェ & S. リーヴァイ作曲・作詩・小池修一郎演出)　9月13日㈯〜24日㈬　中日劇場
(磯貝・服部・玉崎紫（9/16)・玉崎（9/19))

㉒演劇『ヒストリー・ボーイズ』(2005年トニー賞・オリヴィエ賞受賞作品　小川絵梨子演出)　9月13日㈯　13：00〜　世田谷パブリックシアター　(服部)

㉝演劇『火のようにさみしい姉がいて』(シスカンパニー・大竹しのぶ主演)　9月13日㈰　18：00～　シアターコクーン　(服部)

㉞オペラ『おぐりとてるて』(オペラシアターこんにゃく座公演)　9月14日㈰　11：00～　俳優座劇場　(服部)

㉟オペラ『清教徒』(みつなかオペラ　藤田卓也・坂口裕子主演)　9月20日㈯　16：00～　川西市みつなかホール　(服部)

㊱楽劇『白峯』(演奏会形式・世界初演　セントラル愛知響)　9月26日㈮　18：30～　しらかわホール　(塹江)

㊲映画『ジャージー・ボーイズ』(2006年初演トニー賞受賞舞台の映画化)　9月27日㈯　14：00～　MOVIX三好　(玉崎・玉崎紫)

㊳音楽劇『愛・かきつばた姫』(鹿目由紀作・演出)　9月28日㈰　14：00～　パティオ池鯉鮒会館はなしょうぶホール [知立市]　(玉崎)

㊴演劇『背信』(葛河思潮社・ピンター作・長塚圭史演出)　9月29日㈪　19：00～　東京芸術劇場・シアターイースト　(伊藤)

㊵演劇『島』(青年劇場・四日市演劇鑑賞会)　9月30日㈫　18：15～　四日市市文化会館第2ホール　(服部)

㊶映画『ピーター・ブルックの世界一受けたいお稽古』(ドキュメンタリー映画)　9月30日㈫　渋谷「シアター・イメージフォーラム」　(伊藤(9/30)・服部(名演小劇場10/11))

㊷演劇『かすかな痛み』(ハロルド・ピンター作・αの会)　10月1日㈬　14：00～　千種文化小劇場　(玉崎)

㊸ミュージカル『シェルブールの雨傘』(井上芳雄主演・東宝)　10月3日㈮　12：00～　中日劇場　(玉崎・磯貝)

㊹演劇『ロミオとジュリエットのこどもたち』　10月5日㈯　14：00～　あうるすぽっと　(服部)

⑮歌舞伎『錦秋名古屋顔見世』　10 月 5 日㈯～27 日㈪　11：00～（昼の部）＆ 16：00～（夜の部）日本特殊陶業市民会館　（塹江（10/6 昼＆夜）・磯貝（10/18 昼 &10/22 夜））

昼演目：菅原伝授手習鑑（車引、棒しばり、人情噺文七元結）

夜演目：本朝廿四孝、新古演劇十種の内 身替座禅、伊勢音頭恋寝刃

⑯演劇『炎　アンサンディ』（ワジディ・ムアワッド原作・麻美れい主演）　10 月 11 日㈯　18：30～シアタートラム

（服部）

㊂同じ原作によるカナダ・フランス映画「灼熱の魂」（ドゥニ・ヴィルヌーブ監督・脚本）名演小劇場 2012 年上映　（服部（1/14）・伊藤（1/28））

⑰演劇『コラボレーション』（ロナルド・ハーウッド作、劇団民芸）　10 月 12 日㈰　13：30～　紀伊國屋サザンシアター　（服部）

⑱オペラ『リゴレット』（沼尻竜典指揮・田尾下哲演出）　10 月 11 日㈯～12 日㈰　14：00～　滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

（塹江（10/11）・玉崎（10/12））

⑲人形浄瑠璃『文楽』10 月 15 日㈬ ・ 16 日㈭　名古屋芸創センター

（磯貝（10/15㈬・16㈭ 14：00）・塹江（10/15㈬ 14：00・18：00））

演目：「曽根崎心中」「義経千本桜」「菅原伝授手習鑑」「釣女」

⑳演劇『暴走ジュリエット』（柿喰う客公演 中屋敷法仁脚色・演出）　10 月 19 日㈯　13：00～　あうるすぽっと　（服部）

㉑演劇『迷走クレオパトラ』（柿喰う客公演 中屋敷法仁脚色・演出）　10 月 19 日㈯　17：00～　あうるすぽっと　（服部）

㉒演劇『半神』（野田秀樹作・演出　韓国人キャスト公演）　10 月 30 日㈰　19：00～　東京芸術劇場プレイハウス　（伊藤）

㉓ナショナルシアター・ライブ・演劇『フランケンシュタイン』　11 月 2 日㈰　12：40～　TOHO シネマズ名古屋ベイシティ　（伊藤）

㉔ナショナルシアター・ライブ・演劇『コリオレイナス』　11 月 14 日㈮　17：30～　TOHO シネマ

ズ名古屋ベイシティ　(伊藤)

⑮MET ライブ・ビューイング・オペラ『マクベス』　11 月 1 日㈯～7 日㈮　10：00～　ミッドランドスクエアシネマ　(塹江（11/7）・服部)

⑯演劇『39 階段』(2007 年オリヴィエ賞受賞作品・福田雄一上演台本・演出)　11 月 12 日㈫　18：30～　名鉄ホール　(服部・玉崎・玉崎紫)

⑰映画『美女と野獣』　11 月 13 日㈭　ミッドランドスクエア・シネマ　(磯貝)

⑱ミュージカル『雨に唄えば』(2013 年ロンドン舞台・アダム・クーパー主演) 来日東京公演　11 月 15 日㈯　12：30～　シアターオーブ　(玉崎・玉崎紫)

⑲MET ライブ・ビューイング・オペラ『フィガロの結婚』(リチャード・エア演出)　11 月 15 日㈰～21 日㈮　10：00～　ミッドランドスクエアシネマ　(塹江・服部)

⑳バレエ『ドン・キホーテ』(ロシア国立ボリショイ・バレエ)　11 月 22 日㈯　13：30～　愛知県芸術劇場・大ホール　(塹江)

㉑オペラ映画『ナブッコ』(パルマ王立歌劇場公演)　11 月 27 日㈭　13：30～　名古屋芸創センター　(磯貝・玉崎)

㉒ミュージカル『familia－4 月 25 日誕生の日』(TS ミュージカル謝珠栄演出)　11 月 30 日㈰　11：00～　兵庫県立芸術文化センター中ホール　(服部)

㉓演劇『友達』(俳優館　安部公房作・平塚直隆演出)　12 月 2 日㈫　18：30～　愛知県芸術劇場・小ホール　(塹江)

㉔シリーズトーク『4 つの音でオペラができる？』　12 月 5 日㈮　19：00～　愛知県芸術劇場・小ホール　(塹江)

㉕ミュージカル『シカゴ』(宝塚歌劇 100 周年記念 OG 版公演)　12 月 5 日㈮　12：30～　刈谷市総合文化センター大ホール　(玉崎)

㉖音楽劇『ピアノレッスンなう』　12 月 5 日㈮　18：45～　しらかわホール　(服部)

⑰オペラ『こうもり』(名古屋二期会)　12 月 6 日㈯　13：00～　愛知県芸術劇場・大ホール　(玉崎)

⑱オペラ『フィガロの結婚』　(河原忠之指揮・プロデュース　粟國淳演出) 12 月 6 日㈯　14：00～　いずみホール　(服部)

⑲オペラ『サンドリヨン』(マスネ作曲　愛知県芸術大学公演)　12 月 6 日㈯～7 日㈰　14：00～　長久手文化の家森のホール　(磯貝 (12/6)・玉崎・服部 (12/7))

⑳演劇『鼬　いたち』(シス・カンパニー　長塚圭史演出)　12 月 11 日㈭　14：00～　世田谷パブリックシアター　(伊藤)

㉑演劇『8 分間』(燐光群　坂手洋二作・演出)　12 月 12 日㈮　19：00～　愛知県芸術劇場・小ホール　(伊藤)

㉒ナショナルシアター・ライブ・演劇『オセロ』TOHO シネマズ名古屋ベイシティ　12 月 12 日㈮～17 日㈬　11：00～ or 17：00～　(服部 (12/12)・伊藤 (12/15))

㉓オペラ『トゥーランドット』(キエフ・オペラ　ウクライナ国立歌劇場)　12 月 13 日㈯　17：00～　愛知県芸術劇場・大ホール　(塹江)

㉔MET ライブ・ビューイング・オペラ『カルメン』(ビゼー)　12 月 13 日㈯～18 日㈮　10：00～　ミッドランドスクエアシネマ　(塹江 (12/16))

㉕ミュージカル『メトロに乗って』(音楽座ミュージカル)　12 月 14 日㈰　13：00～　幸田町民会館さくらホール　(玉崎)

㉖ミュージカル『アリス・イン・ワンダランド』(鈴木裕美演出・安蘭けい主演) 12 月 19 日㈮　13：00～　中日劇場　(玉崎)

㉗映画『みんなのアムステルダム美術館へ』　12 月 24 日㈬　今池シネマテーク　(蟹江)

㉘ミュージカル『美女と野獣』(劇団四季)　12 月 28 日㈰　13：00～　新名古屋ミュージカル劇場　(磯貝)

[2014 年海外観劇演目]

⑫⑨酒井正志　ロンドン観劇演目：

1．King Lear	1 月 30 日㈮	National Theatre
2．Massenet, Manon	1 月 31 日㈮	Royal Opera House
3．Henry V	2 月 1 日㈯	Noel Coward Theatre
4．Billy Eliot	2 月 1 日㈯	Victoria Palace Theatre
5．The Duchess of Malfi	2 月 2 日㈰	Sam Wanamaker Playhouse

⑬⓪塹江光子　NY メトロポリタン・オペラ観劇演目：

1．『ウェルテル』	3 月 15 日㈯	13：00～
2．『魔法の島』	3 月 15 日㈯	20：00～
3．『ヴォチェック』	3 月 17 日㈪	19：30～
4．『夢遊病の女』	3 月 18 日㈫	19：30～
5．『ボエーム』	3 月 19 日㈬	20：00～

⑬①塹江光子　ローマ観劇演目：

1．オペラ『リゴレット』　10 月 24 日㈮　20：00～（レナート・パルムボ指揮・レオ・ムスカト演出）ローマ歌劇場

2．コンサート『ローマ・サンタ・チェチーリア国立管弦楽団』アントーニオ・パッパーノ指揮　10 月 26 日㈰　20：00～　オーディトリウム・パルコ・デ・ラ・ムジカ

⑬②酒井正志　イギリス観劇演目：

1．The Crucible	8 月 12 日㈫	Old Vic
2．Shakespeare in Love	8 月 14 日㈭	Noel Coward Theatre
3．Julius Caesar	8 月 15 日㈮	Shakespeare's Globe
4．The Duchess of Malfi	8 月 15 日㈮	New Diorama Theatre
5．Shakespeare in Love	8 月 18 日㈪	Noel Coward Theatre
6．King Lear	8 月 19 日㈫	Shakespeare's Globe
7．Medea	8 月 19 日㈫	National Theatre
8．Antony and Cleopatra	8 月 21 日㈭	Shakespeare's Globe
9．Troilus and Cressida	8 月 22 日㈮	Tristan Bates Theatre
10．The Curious Incident of the Dog in the Night-Time	8 月 25 日㈪	Gielgud Theatre
11．Richard III	8 月 26 日㈫	Trafalgar Studios
12．The White Devil	8 月 28 日㈭	Swan Theatre

13. Henry IV Part 1　8 月 29 日㈮　Royal Shakespeare Theatre
14. Henry IV Part 2　8 月 30 日㈯　Royal Shakespeare Theatre
15. The Roaring Girl　8 月 30 日㈯　Swan Theatre
16. The Two Gentlemen of Verona
　9 月 1 日㈪　Royal Shakespeare Theatre

⑬③玉崎紀子・紫ロンドン観劇演目：

1．The Pajama Game　8 月 20 日㈬　15：00～　Shaftesbury Theatre
2．Miss Saigon　8 月 21 日㈭　15：00～　Prince Edward Theatre
3．Jeeves and Wooster　8 月 22 日㈮　19：30～　Duke of York's Theatre
4．Once　8 月 23 日㈯　14：30～　Phoenix Theatre [N]
5．The Curious Incident of the Dog in the Night-Time
　8 月 23 日㈯　14：30～　Gielgud [Y]
6．Shakespeare in Love　8 月 23 日㈯　19：30～　Noel Coward Theatre
7．La Traviata　8 月 24 日㈰　15：00～　Soho Theatre...[N]
8．Dirty Rotten Scoundrels　8 月 25 日㈪　19：30～　Savoy Theatre
9．Jersey Boys　8 月 26 日㈫　15：00～　Piccadilly
10．The Pajama Game　8 月 26 日㈫　19：30～　Shaftesbury Theatre
11．The 39 Steps　8 月 27 日㈬　15：00～　Criterion Theatre
12．The Commitment　8 月 27 日㈬　19：30～　Palace Theatre
13．The Book of Mormon　8 月 28 日㈭　19：30～　Prince of Wales Theatre
14．The Importance of Being Earnest
　8 月 29 日㈮　19：30～　Harold Pinter

Ⅱ．観劇短評選

㉞こんにゃく座　オペラ『おぐりとてるて』―説教節『小栗判官照手姫』より―　9月14日　俳優座劇場

こんにゃく座の新作を俳優座劇場で観た。予想どおりおもしろい作品に仕上がって、こんにゃく座に新たな人気演目が加わったと思われた。観客の期待の高さは、全6公演のチケットが初日前に完売であった事実からも窺える。民衆伝統芸能の説教節は、語り物の原点といわれている。30年ほど前、横浜ボートシアターの演じる仮面劇『小栗判官照手姫』を観たとき、語り物の生み出す奇想天外な宇宙の広がり、英雄の生死と蘇り、民衆の信仰とエネルギーに圧倒されたことを今でも覚えている。その後中西和久ひとり芝居『しのだづま考』や前進座『山椒大夫』の鑑賞時にも同様に、説教節には人間の欲望や願望を語りで発散しやがてそれを静める力があるように思われた。『しのだづま考』の脚本を書いたふじたあさやは、作品に関して、「無数の無名の語り手たちとの合作といってもよい。」(注)と述べているが、今回台本・演出を担当した立山ひろみも、公演パンフレットで「これは、『名もなき、民衆たちの物語』きっと、わたしたちと地続きに生きた、中世の人々と一緒に、たった『今』を生きていただけたらと存じます」と、諸国を旅する説教師とオペラを地方を回って演ずるカンパニーの歌役者を重ね合わせている。作曲家林光亡き後、本作品は、年末に再演される『アルレッキーノ』とともにこんにゃく座の今後を方向付ける重要な作品となるだろう。これもまた、辻辻で旅芸人によって演じられる設定なのである。

さて、『おぐりとてるて』では10人の歌役者が60の役をこなしていたが、辻辻でささらを手に持ち物語の進行を語る説教師には8人があてられて、場所と時間を違え「語り」が歌い継がれ引き継がれていくさまが示される。あらすじはいわゆる貴種流離譚である。京の鞍馬寺にお祈りして授かった鞍馬の申し子小栗は深泥池の大蛇の化身と交わり、東国へ流される。照手姫の美しさに惹かれ強引に婿入りする小栗は、横山一門に毒殺されるが、閻魔大王にこの世に戻され、餓鬼阿弥となって土車に乗せられ藤沢より熊野本宮まで引かれていくことになる。一方照手姫は売りとばされて各地を転々とし、美濃の国に下女として落ち着く。そこに土車が着いたとき、照手は2日の暇をもらって土車を弾く。その後も彼は人々に引かれて、熊野湯の峰で蘇り、照手と結ばれる。この土車を各地の民衆が心一つに弾く歌「えいさらえい」は見終わったとき、口ずさむことができる歌として心に残った。説教節における道行きの語りは、街道筋の風物を取り入れることで情報を伝える役割も果たしていた。同様に「えいさらえい　えいさらえい　供養の車じゃ　お引きあれ」にも各地の風物詞が盛り込まれており、語り手聴き手の双方が悲喜こもごもの生のエネルギーを共有し、また伝えあったことが示されている。

舞台装置については、大きな台形状のブロックと直方体のブロックの向きや配置を変えることで、演技空間を傾けたり広げたりすることで重層的な作品の世界が表わされた。また波瀾万丈の冒険譚に

は、大蛇、人食い馬などの動物、千手観音、閻魔大王など異界の住人が登場する。小道具や装置にも工夫が凝らされ、それを操りまた演じる役者たちの身体の動きの軽やかさや巧みさに感心させられた。

こんにゃく座のオペラは、「歌芝居」というだけあって歌の言葉や内容がよく伝わるが、歌唱力そのものも上がっているようだ。舞台上手に陣取ったサクソフォン林田和之、打楽器高良久美子、ピアノ服部真理子の演奏も豊かな音色と自在なテンポで大変楽しめた。

(注)　ふじたあさや『しのだづま考・山椒大夫考』(199 年、晩成書房) p. 193　　(服部　記)

⑳ペルゴレージ『奥様女中』　3 月 9 日　小牧市東部市民センター

小牧市・小牧市教育委員会主催のクラシック鑑賞講座、「気軽にクラシック　ようこそ!!　オペラの世界へ」は市民対象の全 3 回からなる鑑賞講座である。その最終回、「いざオペラ鑑賞！『奥様女中』」に出かけた。前年の同講座のアンケートでオペラを取りあげてほしいとの要望に応えて、担当講師の宮松重紀が、予算・時間等を考慮にして『奥様女中』の演目を選んだという。以前、同じメンバーでこの作品を上演して回ったことがあるそうだが、この再演は、安易な選択の結果ではなく、鑑賞講座として贅沢すぎるほどの内容と質の高さであった。

実際の上演に入る前に鑑賞講座らしく時代背景や作曲家ペルゴレージの解説、楽曲の解説があった。ペルゴレージは、モーツァルトより少し前の 18 世紀前半に活躍したナポリ派の作曲家である。『奥様女中』は、身分の高い人を主人公にしたオペラセリアの幕間（インテルメッツォ）に、オペラ・ブッファとして上演されていたが、人気が出て単独でも上演されるようになったという。若く美しい女中セルピーナが、主人であるお金持ちの頑固老人ウベルトをだましてその妻の座を勝ち取るだけのわかりやすい話である。宮松は、焼き餅焼きの亭主のアリア「待てど暮らせど」やセルピーナの「わたしのお・こ・り・ん・ぼ」などのアリアのリズムや聴き所などをピアノの弾き歌いで紹介した。彼は学部で声楽専攻だったこともあって、その巧みな歌と解説にイタリアオペラの楽しさとロッシーニにまで続く流れを感じとることができた。上演の字幕なしの便宜を図るように、用意されたハンドアウトには話の流れと共にアリア、デュエットの曲名が記載されていた。

歌手は藤原歌劇団所属のプリマ高橋薫子と立花敏弘で、2 人は御夫婦である。スーブレット役のため高橋は短めのドレスを着ている。機転の利くセルピーナは、表情豊かで健康的な美声であった。コミカルな歌とどこまでが演技でどこからがアドリブなのか見分けのつかない動きで、主人役ばかりか観客もはらはらどきどきしてしまった。フィナーレの「いつまでも一緒にいてくれる？」では息もぴったり、現在日本でこの演目を歌わせたら、この 2 人の組み合わせが最高だろう。小道具についても、歌手が自宅から持ってきたとか会場の椅子であるとか、楽屋裏が披露され、親近感と手作り感満載の上演であった。

かつて『奥様女中』はフランスにイタリアオペラを広めるきっかけを作ったと言われているが、上演時間が短く、狂言のように生き生きとした庶民が活躍して権威をからかうこの作品は日本においてもオペラ愛好者を増やす作品として適していると思われる。すばらしい演奏に接したこの日の観客の

中にオペラ初体験の人がいたら、その人はリピーターになるかもしれない。チケット代は1000円。ただ、観客の少ないことが残念であり、出演者に申し訳ない気さえした。せっかくの公演である。公共交通機関で行きにくい場所ではあるが、主催者は、宣伝とチケット入手方法等に工夫を凝らして、集客をもう少し試みても良かったのではないだろうか。　(服部　記)

㊺『清教徒』　9月20日　みつなかホール

第3回みつなかオペラ、Ⅴ.ベッリーニ“ベルカント・オペラ”シリーズ～作曲家に愛された作曲家、旋律の魔術師ベッリーニの世界～Ⅱ『清教徒』全3幕を観た。一昨年昨年に続いて、チケット完売が示すとおり、期待以上のすばらしい公演であった。

この作品は17世紀中葉のイギリスが舞台であるが、清教徒と王党派の対立の描かれ方は荒唐無稽の御都合主義である。観客は歌手の声を目当てに劇場に行くが、主役級4人の歌手を揃えるのが難しいため、あまり上演されない作品であった。

2014年春パリのバスチーユ座では本作品が27年ぶりに上演され、ライブビューイングで日本にいても見ることができた。シャンタル・トマによる装置は、鉄パイプだけで作られた城塞を表す巨大な鳥かご状のもので、その内部にはベッドが置かれていた。ストーリー全体がエルヴィーラの見た悪夢の世界としてローラン・ペリによって演出されていたのである。行き当たりばったりのプロットでは、写実を抑えた象徴的な装置の方が歌に集中でき矛盾を感じさせないと思った。歌手たちは舞台を縦横に動き回り、躍動感に溢れた歌を歌っていた。流石パリ、日本ではこんな具合に行かないだろうとの思いは、みつなかホールで覆された。

みつなかオペラでは声の競演／饗宴に酔いしれたというのが、率直な感想である。オーソドックスでシンプルな書き割りや照明は、観客の意識を声に集中させてくれるものであった。20日のアルトゥーロ役の藤田卓也はハイFの高音を楽々と、ブレスもあまり取らずに響かせた。馴染みのない名前だったのでプロフィールを見ると、ヨーロッパで歌ってきた人らしかった。まさにテノールの新星登場であった。リッカルド役の迎との2重唱もすばらしかったが、3幕でエルヴィーラ役の坂口との2重唱では、観客の拍手が鳴り止まず、2人は長い間抱き合ったままでいた。坂口が拍手を手で静止して、次曲を歌い始めたのには、客席から賞賛と驚きの声が漏れたほどだった。ミラノ在住の彼女は昨年同ホールで、ジュリエッタを歌い注目を集めたが、今年も、よく転がるが芯のある美しい声で歌った。ヨーロッパ仕込みなのか、狂乱の場面では手の動きなどにも神経が行き届いて、かわいらしく自然な演技だった。昨年のロメオ役高谷みのりはエンリケッタで、関西の舞台に欠かせないバスの片桐直樹も大変良かった。

ザ・カレッジオペラ管弦楽団は、歌手たちのパワーと観客の熱気に乗せられてか、行け行けどんどんのうねりのある演奏だった。終了後ホールは熱狂に包まれて、拍手と歓声がなかなか静まらず、終了時刻が予定より大幅に遅れていた。上気した観客からは、「よかったね」というよりも「すごかったね」という声が発せられていた。21日の別キャストでの演奏については不明だが、日本人歌手の

実力が上がってきていることは実感できた。合唱も美しく揃っている。このシリーズオペラが関西のオペラ界の耳目を集め、大きな成果をもたらしていることは、関西でオペラに携わる有名無名の人びとが会場に多数いたことからも窺える。みつなかホールでは上演開始5分前のチャイムが『清教徒』のメロディから作られていた。この遊び心と企画から上演までの行き届いた運営が、上演の質を保つのに欠かせないのだろう。低料金でレベルの高い演奏を提供し続けている秘密は、その辺りにあると思われた。 (服部　記)

⑯『炎　アンサンディ』　10月11日　シアタートラム

レバノン出身で内戦を逃れカナダに渡った作家ワジディ・ムワワドによる『炎　アンサンディ』をシアタートラムで観た。世田谷パブリックシアターによる企画制作である。

現在と過去のモントリオール、内戦の続いている中東の現在と過去が、三方が客席に囲まれた舞台上で、白い布、3脚の椅子、奈落の簡単な装置と7人で21役を演じた俳優で描き出された。日本の平和な日常とはかけ離れた遠い国の出来事と思われたが、ストーリーが展開するにつれて物語世界に引き込まれ、言葉と沈黙、親子の愛憎、生と死、理性と感情など人間存在の根源的な問いに対峙を迫られているように感じた。世田谷パブリックシアター芸術監督野村萬斎の「ごあいさつ」にあるとおり、「人間の根源をも問う、現代劇でありながら、壮大なギリシャ悲劇の『オイディプス王』を思わせる」作品となっていた。

物語は謎解きの形で進行する。カナダ在住の中東出身の女性ナワルは「こうして一緒になれたから大丈夫」という謎の言葉を発した後5年間の沈黙の末に双子の娘と息子に奇妙な遺言を残して死ぬ。「あなたの父を捜し、この手紙を渡して」「あなたの兄を捜し、この手紙を渡して」と。心を閉ざしてきた母の遺言に、二人は戸惑いを感じるが、数学を研究している姉は中東へ旅立つ。彼女は「1＋1＝2とならない」数学について語り、難解な数式を繰り返す。10代から60代までのナワルの歩んだ軌跡と兄・父の痕跡、現代のエピソードが舞台上で交差し、次第に複雑な関係が解き明かされて真実が明らかになる過程は緊張に満ちて、見る側に思索を促した。劇中で繰り返される数式と母の遺言の謎を解く過程が、パラレルに対置されているが、ストーリーが進行するに連れ、数式は、新しい世界をこじ開け認知するために存在することが明かされる。

麻実れい演じるナワルは10代のとき、「こうして一緒になれたから大丈夫」と繰り返した初恋の人の子を身籠もるが、他民族のこの男は殺され、赤子は取りあげられて孤児院へ送られる。女の憎しみと悲しみの連鎖を断ち切るには、「よく書き、よく読んで、数えて、よく学んで」いくことが必要であると、祖母は説く。読み書きを覚えて再びムラに戻ってきたナワルは、祖母の、名前のない墓石に文字を刻み弔う。ナワルの奇妙な遺言にも、「遺体は地中の穴にうつぶせに入れ、バケツ3杯の水をかけるだけ、墓碑に名を刻むな」とあった。彼女の墓石に名が刻まれるのは、真実が明らかにされた後である。つまり、文字を刻んで埋葬の儀式を完了することは、負の連鎖にピリオドを打つ象徴的な行為なのである。

さて、ナワルに読み書きを習うサウダとともに先々のムラで子どもを探し続ける2人には突き抜けた明るさが感じられ、サワダはいつも歌を歌っている希望の存在として那須佐代子によって生き生きと演じられていた。憎しみと報復の連鎖は続くが、イスラムの具体的な土地の名前や部族の名前が語られることはなく、女2人がどうやって放浪できたのかも不明である。しかし負の連鎖に絶望し子どもは殺されたと諦めた後、サウダは自爆テロに走り、ナワルは政治の指導者を殺して監獄に送られる。そこで彼女は拷問と陵辱を受けても歌を歌い続ける伝説的な「歌う女」となる。映画版『灼熱の魂』には、サウダは登場しない。映画で1人で演じられていた役を、舞台では2人が担うことによって、神話的な女性をより立体的身体的に現前させたと考えられる。「歌う女」には巫女的な響きがある。拷問に決して屈しないのは聖性を帯びた「歌う女」でしかあり得なかったのかもしれない。岡村健一はナワルの初恋の男と、子を孕ませた兵士とを演じた。彼は生き別れの母を捜し続け、絶望の後に冷血なスナイパーになった。彼が歌を口ずさみながら銃口を客席に向けたとき、思わず目をつぶってしまう程の恐ろしさと狂気を感じた。

やがて弟も公証人に促され、兄を捜しにイスラム社会の深部に入っていく。姉と弟、生と死、愛と憎しみ、父と兄が起源に立ち戻り、母と息子と父の関係を悟るのである。双子から手渡された手紙を読んで、兄にして父も沈黙する。ナワルは、「時間は存在しない」と語っていたが、彼女を葬った大地の穴は言語の絶するゼロ地点だったのである。対立項が重なり、再び墓参した3人の背後にナワルが女神のように登場して最後の手紙を読む。降り注ぐ雨とナワルの言葉は慈愛に満ち、炎を静めるように感じられた。人々が救済されたとは考えにくいが、少なくともお互いが認め合う契機の訪れを感じた。芝居が終わり、劇場空間を充たした一瞬の沈黙の後すぐ、拍手と共に「ブラボー！」がかかった。3時間、緊張を強いられる圧倒的な舞台であったが、悲惨で暴力的な内容にも関わらず、劇場を去るときには清々しさすら感じ、見てよかったと思われた。

2014年12月現在におけるイスラム国の報道や「女の子に教育を」と訴えたマララさんのノーベル平和賞受賞を考えると、この作品に描かれた世界は私たちにとっても遠い話ではない。圧倒的な権力と暴力の前に、言葉はしばしば無力ですらある。しかし、良く練られて詩的な劇の言葉は、人間の尊厳、愛憎、言葉の力、知への渇望、救いへと観客の思索を誘った。俳優たちの演技、上村聡史の演出、赤い光や黄色い光を使い分けた沢田祐二の照明などもすばらしいが、商業ベースに乗らないこの種の作品を企画上演する場があることこそすばらしい。新たな文化を担う公共劇場は、目新しいものを発信するだけではなく、そこに集う人々に社会の新たな見方を提供し対話や交流をもたらすことが求められる。シアタートラムはその役割を果たそうとしているように思われた。ちなみにこの作品は兵庫県芸術劇場中劇場でも1回上演されている。シアタートラムより広い劇場空間で、緊張感・衝撃力はどう伝わっただったろうか。

(服部　記)

⑩⓪柿喰う客『暴走ジュリエット』　10 月 19 日　あうるすぽっと
⑩①　〃　　『迷走クレオパトラ』　　〃　　〃

女体シェイクスピアシリーズの 5 作目「暴走ジュリエット」と 6 作目「迷走クレオパトラ」の同時上演をマチネ公演とソワレ公演で 1 日で観た。これらは、池袋にある、あうるすぽっと（公益法人豊島未来文化財団）との共催でシェイクスピア生誕 450 年を記念した「シェイクスピアフェスティバル 2014」の参加作品である。このフェスティバルでは、若い演出家たちが、軽々と時代を飛び越えて、21 世紀のシェイクスピアもまた健在であることを示してくれた。

本公演のチラシには「異なる角度から恋愛を描いた 2 作品を同時に上演することで、シェイクスピア作品の『人間に対する深い考察を立体化し、政治や歴史といった、男たちの事情に巻き込まれてしまう女の宿命、しかしそれでも恋に生きる女の強さや覚悟を、若手女優 14 名で描き出す」とある。両作品における、若者の性急な恋と大人の円熟した恋は、従来より対比されて論じられてきたが、今回の試みが興味深いものであったことは、評者のように 1 日で 2 公演を観た観客が多かったことからも推測できる。

舞台装置は原田愛による。舞台中央に円形のステージ、さらにその中央に一段高い円形のいわゆるお立ち台が置かれている。女優は入退場を繰り返すだけでいろいろな角度から観られることになる。そして、背景の装置の上下が入れ替わっていることを除けば、2 作品とも同じ装置である。

柿食う客のこのシリーズは、出来事や人物像が、舞台上で可能な限り可視化され言語化される。照明の目つぶしや効果音を多用して観客の意識にイメージを集積していく演出方法は、2 作品を対比することでより効果的であるように思われた。

『暴走ジュリエット』はジュリエットとロザラインにセーラー服を、若者たちにはブレザーの制服を着せて学園ドラマの体裁をとり、ボキャブラリー貧困の短いセンテンスで演じられた。原作に於いてジュリエットが 14 歳であることが強調されているのである。例えば、有名なバルコニーシーンは「名前なんかポイしてさ」と語られた。マーキューシオ―の死までは客席に笑いが溢れていたように思う。ファッションショーのように女優が入退場し、お立ち台で腰をくねらせポーズを取るたびに稲妻のようにライトが光り、ビートのきいた大音量の音楽が止まる。見せる芝居でありながら、女優たちが状況や関係を言葉で説明し、劇世界を創りあげた。パリスは美形・長身で、ロミオはなよなよして、ジュリエットは潔かった。劇団の看板女優の七味まゆ味がジュリエットの母を、深谷由梨香がロレンス神父を演じた。芸達者な 2 人のテンポ感溢れる大げさな演技は舞台に活力を与えた。ロレンスは一連の物語の成行きを総督に語る人物でもあるが、途中省略の説明は笑いを誘い、虚構を飛び越えて、喜劇であるはず。若者の恋が悲劇で終わることに逆にリアリティを与えてしまったようだ。大人たちが反省の言葉を発したとき、悲しいと思ってしまったのには、自分自身驚いた。

『迷走クレオパトラ』においては、対照的に台詞のセンテンスは長く、ゆったりと語られて世界観の違いが示されていたが、長いフレーズは若い女優の未熟さを露呈してしまった。劇中の音楽は演歌調だった。同シリーズ 3 作目『発情ジュリアス・シーザー』のときと同じく明治維新をイメージして

演出されており、七味がアントニーを、深谷が町人風のイノバーバスを演じた。外見は格好良いがもたもたしたアントニーは自らの言葉に突っ込みを入れて、観客の失笑を誘い、英雄像を異化した。侍女と共にチャイナドレスを身に纏ったクレオパトラが、最後にぬいぐるみの毒蛇を首に巻き付けてクレオパトラが死んでいくとき、その背後に既に死んだはずのアントニーが現れた。彼女の語る幻はこのようにして現前化される。また侍女の１人は片言の外国人風の日本語を操っていた。ローマ人とは異なる行動規範を身につけているのが、舞台上で視覚的にも聴覚的にも表されていた。オクタヴィアヌスはジュリエット役の佃井が凛々しく颯爽と演じていたが、原作では、知的かつ冷淡で肉体的な弱さすら感じさせる人物である。さらに、チラシでは「最後の恋は国家を捨て」「迷走」するのは、クレオパトラであるようだが、原作においても舞台においても実際にそう行動するのはアントニーであろう。違和感を覚えた。しかし、登場人物間の力関係や作品世界を動かしていたのは登場人物の抱く違和感だろう。違和感の現前化はこの作品において重要なテーマである。

『暴走ジュリエット』の方がおもしろかったが、対比上演の試みが興味深いことに変わりはない。
(服部　記)

⑩⑨『雨に唄えば』(*Singin' in the Rain*)　11 月 15 日　12：30～　東急シアター・オーブ　渋谷東急ヒカリエ

今回観劇した『雨に唄えば』(Singin' in the Rain) は、言わずと知れた 1952 年公開の MGM 映画ミュージカルの翻案舞台化である。当今映画の舞台化が主流だが、実はミュージカルが確立し始めた頃、オリジナルでなければ、『オクラホマ！』や『マイ・フェア・レディ』のように、舞台劇のミュージカル化であり、それが慣習であった。そこでこの『雨に唄えば』も長く舞台化されず、映画から 30 数年経って初演された。だが、ブロードウェイ公演 (1985) は失敗に終わったのに対し、ウエスト・エンド (1983) ではロングランになり、以降頻繁に再演や、新演出の歴史が続いている。1983 年の公演そのものは大して評価されなかったが、イギリスのロック界のアイドル、トミー・スティール (Tommy Steele) 主演により、3 年以上もの長期公演後、1994 年には主演をおりたスティールの演出で再演された (約 1 年間の国内ツァー公演)。

2000 年にはジュディ・ケリーによる新演出で公演された。ケリーはロイヤル・シェイクスピア・コンパニー (RSC)、ナショナル・シアター (NT)、チチェスターなどの芸術監督を歴任した名演出家で、当時芸術監督であったヨークシャーでまず公演し (1999 年 11 月から約 3 ヶ月)、その舞台がウエストエンドに凱旋した (2000 年 6 月から、断続的に約 3 ヶ月)。振付は、NT 制作のミュージカル振付を担当するスティーヴン・ミアであった。次に 2004 年 7 月から 9 月 (6 週間) のサドラー・ウエルズでの公演があり、ポール・ケリソン演出、アダム・クーパーの振付・主演であった。歴史的『回転木馬』(Carousel, 1992) が NT のニコラス・ハイトナー演出でロイヤル・バレエのケネス・マクミラン振付と思い起こすと、イギリスでは演劇畑の名演出家とロイヤル・バレエの伝統が、名作ミュージカルの舞台を支えていると分かる。

さて、今回の舞台は、同じアダム・クーパー主演の 2004 年舞台を踏まえ、チチェスター演劇祭で公演がスタートした。2011 年 10 月から 3 ヶ月の公演は、主演のクーパー、演出のジョナサン・チャーチ、振付のアンドリュー・ライトのいずれもが有力各紙の批評家連から最高級の評価をうけ、チケット完売の人気であった。直後、2012 年 2 月から 2013 年 6 月まで、ウエスト・エンドで（それも大型劇場パレス・シアターで）長期公演された後、2013 年 11 月から 2014 年にかけ、約 1 年間全英ツァーが行われた。東京公演はほとんどが全英ツァーキャストだが、主役だけは日本でも大人気のアダム・クーパーが来日したのが、特筆すべきである（2014 年 11/1-11/24 の公演）。

映画ミュージカルの脚本は、作詞家・脚本家のペアであるベティ・コムデンとアドルフ・グリーンの共作で、今回の舞台もそれに基づいている。彼らはバーンスタインと組んだ『ワンダフル・タウン』(Wonderful Town, 1953）と『オン・ザ・タウン』（On the Town, 1944. 邦画題名『踊る大紐育』）などで有名である。しかしこの『雨に唄えば』の脚本では、映画制作者アーサー・フリード（曲）とペアのナシオ・アーブ・ブラウン（歌詞）の歌を中心に様々な歌を MGM 映画から使う企画で、コムデン＆グリーンは、常のように歌により人物を演劇的に造型する脚本を作ることはできなかった。いわば歌のつぎはぎ（パスティーシュ）用の脚本ということで、ミュージカル作者としての彼らの本領と才能を生かしきれないものであった。そこでこの脚本は浅薄と言われるが無理もない。唯一「モージズ・サポージズ」(Moses Supposes）だけがフリード＆ブラウンと無関係で、コムデン＆グリーンの歌詞である。

こうした制作事情から、この映画も舞台も、1920-40 年代に隆盛を極めたミュージカル・コメディである。その後、オペラと同様の登場歌をもち、歌やダンスが人物を語る芸術性・演劇性の高い音楽劇（ミュージカル・プレイ）を目指すミュージカルという様式が主流となる以前の形式といえる。それでも、コムデン＆グリーンらしい愉快なギャグとユーモアに満ち、早い場面転換の中、いきの良い若者たちが活発に歌い踊り、いかにもアメリカ的な陽気さをもつミュージカル・コメディとなっている。

映画の筋や歌をそっくり踏襲した舞台ミュージカルであるが、同時代の映画から新しい歌（You Stepped Out of a Dream）を入れ、さらにほぼどの歌にも 3 コーラスぐらいのダンスを入れ、良い歌はリプライズすることで、映画よりも舞台は長くなっている（1 幕：70 分、2 幕：60 分)。また舞台ミュージカルでは歌がないと主要人物と言えない慣習から、サイレント映画の美女リーナ・ラモントに「私のどこがいけないの？」(What's Wrong with Me?）という歌が付け加えられている。もちろん、トーキーでは喋れないひどい声と訛で、歌も音痴という設定なので、リーナ役の女優は骨折って下手に歌い拍手をあびている。こうした映画との違いはあっても、コミカルな歌のみならず、歌とダンスの照明や美術にも工夫を凝らしたロマンチックな場面（You Were Meant for Me, Would You)、映画好きに印象的な音楽を（Broadway Melody から）BGM にしたセクシーな美人のバレエ場面（Broadway Ballet）など変化にとんだ舞台で、観客の目を奪う。

しかし、何より、題名歌の『雨に唄えば』をクーパーが歌い、傘をさして雨の中を少年のように無邪気に飛び跳ね、しかもスタイリッシュに踊るのに、観客は大喜びだった。批評家からも賞賛された

のも当然の舞台であった。クーパーはロイヤル・バレエの主役を務めた後ミュージカル俳優、また振付家として活躍しているスターなので、さすがにそのダンスが見事で素晴らしかった。2002 年の『オン・ユア・トゥーズ』（ストゥットガルト・バレエ団）来日公演では、クーパーのダンスに感銘をうけたが、今回はコメディも歌もミュージカルとしてより魅力的になっていると感じた。コムデン＆グリーンのギャグとユーモアのあるセリフが、作品全体を活気あふれ陽気な舞台にしていた。さらに背が高く、手足の長いクーパーがパ・ド・ドゥーでバレエ風ロマンチック・ダンスを踊ると、気品があり見ごたえがあった。オペラの人物造形をそなえたミュージカルとしては欠けるものがあっても、ショウとして文句なしの完成された公演であった。

来日公演と相前後する 2014 年 10 月からクーパーの振付による『サニイ・アフタヌーン』（Sunny Afternoon）がロンドンで始まり、公演延長の人気作となっている。俳優としてのクーパーは当代人気の演出家マイケル・グランデジの『ガイズ・アンド・ドールズ』（Guys and Dolls, 2005-6）に主役スカイとして出演もしたが、将来ミュージカル『カーニバル』（映画題名リリー Lili, 1953）をやりたいというので、無垢な娘リリーを恋する陰影のある人形師としてのダンスを踊ってくれたら見事にちがいないと期待している。（玉崎　記）

⑬③ *The Pajama Game*: A Musical Comedy　8/20 (Wed.)　15：00-　Shaftesbury Theatre

本作品は、2013 年チチェスター・フェスティヴァル（Chichester Festival）でチケット完売の人気舞台（4/22-6/8）で、2014 年春にロンドン、ウエスト・エンドに開幕した（5/2〜9/13 限定公演）。チチェスター・フェスティヴァルは、1962 年にローレンス・オリヴィエが芸術監督となり、全作品を演出して始まり、ナショナル・シアター劇団がここで創立された。その結果、この演劇祭での制作舞台は、ナショナル・シアター公演となってロンドン上演される伝統が生まれ、単なる地方公演とは一味違う。チチェスターは、ロンドンから鉄道で南に 1 時間の風光明媚な町で、演劇祭は春〜夏に開催され、有名演出家が力を揮い、一流俳優達が出演し、観客はロンドンから観劇におし寄せる。ウエスト・エンドでも高く評価される極めて質の高い舞台が有名で、昨夏観劇したノエル・カワード作の『プライヴェイト・ライブズ』（Private Lives, Gielgud Theatre, 2013 6/3-9/21）も、今秋東京へ引越公演にきた『雨に唄えば』（Singin' in the Rain, Palace Theatre, 2013 2/18-6/8）もチチェスターで成功し、ウエスト・エンドに凱旋した舞台である。

この作品『パジャマ・ゲーム』（1954 初演）もナショナル・シアターの芸術監督だったリチャード・エア（Richard Eyre, 1943 生）演出の舞台だから、見のがしていけない、見のがすことができない名舞台だという前評判であった。実際、作品自体が名作で、初演舞台は当然トニー賞作品賞を受賞し、再演 2006 年版舞台もカスリーン・マーシャル（Kathleen Marshall）の振付演出、主演がハリー・コーニック・ジュニア（Harry Connick Jr.）とケリー・オハラ（Kelli O'Hara）という優れたペアに恵まれ、リヴァイヴァル作品賞を受賞している。

リチャード・エアは 2013-2014 シーズンに MET『フィガロの結婚』と『カルメン』（再演）（MET

ライブ・ビューイングで 2014 年上映）を演出し、1994 年コヴェント・ガーデンの有名なゲオルギュー主演・ショルティ指揮の『椿姫』公演演出が彼のオペラ・デビューであった。実はオペラだけでなく、彼は少年時代からミュージカル愛好者で、最初に繰り返し聞いた LP がロンドン舞台『パジャマ・ゲーム』ということなので、その先輩格にあたる『ガイズ・アンド・ドールズ』をナショナル・シアターのために演出し（1982）、名演出として大評判になった。この NT公演は、アメリカン・ミュージカルがウエスト・エンドで 1 流の演出家にとりあげられるべき演劇作品と見なされる契機となった。ナショナル・ロイヤル・シアター芸術監督時代（1987-1997）にシェイクスピア劇のみならず、古典劇及び現代劇演出でも名声を得たが（ナイト叙勲）、彼の芸術監督時代がブロードウェイからさえも、ウエスト・エンド制作演出によるアメリカン・ミュージカル公演が見るべきと認識される転回点となった。ニコラス・ハイトナー演出とケネス・マクミラン振付による『回転木馬』（1992）、さらにエアの後を継いでナショナル・シアター芸術監督になったトレヴァー・ナン演出による『オクラホマ！』（1998）と『マイ・フェア・レディ』（2001）といった名作舞台の上演への道を拓いたのである。ブロードウェイからのツアー公演ではなく、ブロードウェイ・ミュージカル名作のロンドン制作による優れた再演が人気を得て、ブロードウェイに匹敵されるロンドン・ミュージカルというジャンルの誕生をもたらした。フランス・ミュージカルの翻案である『レ・ミゼラブル』により、このジャンルを確立したロンドン・ミュージカルではあるが、今では、頻繁にロンドン発ロンドン制作の新しいミュージカルが上演されるようになり、その一つ『メアリ・ポピンズ』（2004）はエアの演出で、『ビリー・エリオット』（2005）や、『マティルダ』（2010）と共にロンドン発新作としてブロードウェイにも進出した。ロジャーズ生誕 200 年記念という事情で、再演作品『オクラホマ！』もブロードウェイに進出した（1998 7/15〜1999 9/26 WE 再演、2002 年 3/21-2003 2/23 B 移転）。

そこで今回ロンドンに行く前からもっとも期待しており、期待にたがわずすばらしい舞台であった。とはいえ、紫はほかの最近初演の舞台（例えば、『ジャージー・ボーイズ』や『ブック・オブ・モルモン』など）のほうがもっと良かったといい、私の 40-50 年初演の舞台（ジャズ音楽主体）が好みということも評価の違いに影響している。物語は、

> アイオワ州田舎のパジャマ工場「スリープ・タイト」（Sleep Tite）社に、ハンサムなシド・ソロキンが労組対策の新工場監督として、やってくる。彼は労働組合の代表で怒りっぽいベイブ・ウイリアムズにたちまち恋してしまう。だが組合の 1 時間 7 セント半の賃上げ要求が経営側に拒否され、二人は激しく相争う立場になり、恋は滑らかに進まない。ミュージカル・コメディらしく、最後には恋が全てに勝つのだろうか？

という 1930-40 年代に流行したハリウッドのスクリューボール・コメディ（screwball comedy）の伝統にあるものだが、ドラマは演劇的深みにかける。しかし筆者は、何よりこのミュージカルの歌の良さを指摘したい。そしていかにもアメリカ喜劇らしい歌詞で、ある意味ロンドン舞台には庶民的でアメリカ的すぎるブロードウェイ・ミュージカルを、ロンドンで成功させた演出家リチャード・エアとキャストに感謝したい。初演舞台は、今ではボブ・フォッシーの振付ゆえにミュージカル史上に残ると思われている。しかし、実は優れた音楽と歌詞のゆえに、活気があり楽天的で俗語も使いながら

楽しい典型的なアメリカン・ミュージカルとして歴史に残るべき作品である。残念なことに、このミュージカル（The Pajama Game, 1954 初演）の作曲家ジェリー・ロス（Jerry Ross）が、名作『くたばれヤンキース』（Damn Yankees, 1955 初演）をリチャード・アドラー（Richard Adler　曲についてロスに劣る）と共に書いた直後、29 歳の若さで急死したために、ロスは実力に応じた名声を得ていない（この二人は『ガイズ・アンド・ドールズ』で名をなしたフランク・レッサーの直弟子であった)。しかし心に残る恋の歌「ヘイ・ゼア」(Hey There）や、ラテン・リズムの誘惑的な歌「ヘルナンドの隠れ家」(Hernando's Hideaway）があり、古典喜劇の伝統にそった中年の喜劇的人物（性格俳優）の愉快な歌とタップ・ダンス、「決して二度と嫉妬しない」(I'll Never Be Jealous Again）のような歌は皆、歌と人物が巧みに結び付けられ構成されている。そこでこの作品は単なるミュージカル・コメディに終わらず、歌が人物を語る演劇的な作品となっている。今回の舞台でこのハインズを演じるピーター・ポリカープ（Peter Polycarpou）は、トレヴァー・ナン演出の『オクラホマ！』で、浮気っぽいアニーを口説くペルシャ人の行商人アリ・ハキムを演じた名喜劇俳優である。歌詞はいかにも庶民的で、レッサーの『ガイズ・アンド・ドールズ』におけるやくざという口実もなしに、下品なほどに明るく陽気である。ブロードウェイ初演主役男優はロジャーズ＆ハマーシュタインⅡ世の第 2 作『回転木馬』（1943）の主役ビリーを演じたジョン・レイトで、オペラ歌手のように歌うべき内的独白（Soliloquy）を歌いこなした美声の歌手であった。そこで "Hey There", "There Once Was a Man", "Once a Year Day" などの歌が魅力的旋律をもった優れた曲である。そして「ヘイ・ゼア」は、当時の会社幹部が使用したディクタフォン（『昼下がりの情事』でアメリカ人実業家役のゲーリー・クーパーが使用）を使った面白い仕掛けがあり、ディクタフォンと合わせ歌う 2 節目は、シドの心の中とシドの対話となる。元来この歌詞は、「恋に夢中で眼を輝かせたお前、恋に溺れ馬鹿な振る舞いをするんじゃないよ」と、自身に語りかける歌で、なかなか皮肉で凝っている。その皮肉な歌詞が非常に美しいメロディで歌われ、恋のバラードとなる。また 2 幕で、労使対立のため交際を絶った悲しみをベイブが歌う「ヘイ・ゼア」のリプライズで、さらに恋の歌らしい哀愁にみちた雰囲気を高める。

　ジェリー・ロスがヒーローには歌のうまい歌手が必要と主張した通り、主役はオペラ的名曲を幾つもテノールで朗々と歌わねばならない歌中心の役柄である。そこで彼がシカゴからアイオワの田舎の工場に来て歌う登場歌は「新しい町は憂鬱な町」(A New Town is A Blue Town）で、題名の通り、ブルースで都会人の孤独を感じながら、しかしこれから新しい町を征服してやるという決意を男らしく歌う歌となっている。それを今回のロンドン舞台のマイケル・ザヴィーア（Michael Xavier）は、工場でのラフな普段着とは違い、事務鞄を抱え、中折れ帽、長いコートと都会的なホワイトカラーらしい服装で一人登場して朗々と歌い、長身でもあり美声と男らしさで、主役シドの雰囲気を表していた。彼は昨夏『サウンド・オブ・ミュージック』の舞台で、大佐を演じて、その歌唱と背の高い容姿で魅力的であった。それに対し、主役女優のベイブは、「彼なんか恋してはいないわ」(I'm not at all in love）と、いかにも強気で活発な、自分の意見をはっきり言うアメリカ娘らしい歌で登場する。それでいて、恋におちると、I love you というシドに、Tell me more と迫るという明快さをもつ。そしてシドの「昔々一人の男がいた」(There Once Was a Man）に対し、情熱的な女ジュリエット

を例に、私は彼女よりもっと愛しているわと歌うのである。ベイブを演じるジョアナ・ライディング(Joanna Riding) は『マイ・フェア・レディ』(2002) のイライザを含めオリヴィエ賞主演女優賞を3回も受賞している名女優であるが、声はややハスキーで、美声主役というより、アメリカ女性らしい元気にあふれ才気煥発でむしろコメディエンヌの特性が魅力的である。だが喜劇的脇役は社長秘書グラディスで、初演ではフォッシーの当時の助手でダンサーのみならず、振付もこなす名ダンサーであったキャロル・ヘイニーが演じた。そこで初演では主役のベイブや、シド役はたいして踊らず、歌う役に徹するという配役になっていた。リチャード・ロジャーズ＆ハマーシュタインII世以降の初期ミュージカルは、美しいソプラノかテノールのロマンチックな恋の歌を歌う主役男女、コミックな軽い歌を歌う踊りの名手が喜劇的な脇役ダンサーと配役が分けられていた。しかし今回の舞台で、スティーヴン・ミア (Stephen Mear) の振付は、主役二人もデュエットで歌うだけでなく、ダンスが求められており、ライディングとザヴィアは、「昔々男がいた」では見事に息のあったダンスをみせ、両者がイナバウアーのような背中を反らせるポーズで、中央で手を握り合うという見せ場を演じた。フォッシーらしいダンスをグラディスが中心で踊る賑やかな群舞「1年に一度」(Once a Year Day) も、最初はシドの歌で始まり、二人がデュエットで踊った後、社長秘書グラディス中心の群舞となる。さらにグラディスは組合大会の余興に、「スティーム・ヒート」(Steam Heat) を踊り、柔軟な身体と独特な手足の使い方で、セクシーでコミックなフォッシー・スタイルを見せる。今回の舞台のダンス振付は、初演のフォッシーの振付を離れたスティーヴン・ミアの現代的振付が評価されているが、この有名な「スティーム・ヒート」だけは、フォッシー・スタイルを守って振付けたとのことである。今回の舞台はスティーム・ヒートと歌うと、床下から本物の蒸気が噴水のようにあがり、舞台効果が冴え見ものであった。こうして、恋とコメディの融合した歓喜にあふれた舞台となっていた。

最後は、シドが社長の2重帳簿を見つけ、組合を騙していた社長に妥協案として即座に7セント半の値上げを実現させる。労使の争いは終結し、交際を絶っていたシドとベイブは結ばれ、「パジャマ・ゲーム」の歌にのせて社員全員のファッション・ショウで幕がおりる。

実は、ドリス・デイはよくないと評されるが、ほかの重要な俳優は初演舞台のままの配役で優れた喜劇となっている映画 (1958) からみると、このリチャード・エアの新演出は、同時代性をもっていた初演舞台と違い、今から60年前のアメリカを映し、1950年代のアメリカを変化する時代としてとらえ、その発展し、元気な生き生きとした庶民の力を見せる舞台となっている。戦後の繁栄に沸いているが、実はアカ狩りなどで深刻な社会問題が生じていたアメリカを労使の対立で象徴的に表している。『オクラホマ』の2幕開幕の「農夫と牧夫」の大合唱と群舞と同じように明るいアメリカを歌っていると思われる『パジャマ・ゲーム』の工場労働者達のピクニックの合唱とダンス「1年に1度」は、繁栄するアメリカ社会と見えるが、実はパジャマ工場に見られる非人間的な能率的流れ作業で働かされる労働者を、Hurry up, 時間と勝負だという歌でも明らかにし、繁栄の裏側の弱者を利用する資本主義を示し、そうした抑圧を解放するものとして、合唱とダンスがある。アメリカン・ミュージカルの音楽は、ジャズに原型をもつブルース (New Town)、シンコペーションの効いたリズミカルな歌 (I'm Not in Love)、そして誘惑的女性の歌い踊るラテンのリズム (Hernando's Hideaway)、

1 幕の終わりの全員が元気よく歌い踊り盛り上げる曲（Once a Year Day)、二人の恋の歌（There Once Was a Man）は過去の英雄やヒロインを語る歌詞ながら、音楽はカントリー・ウエスタンである。さまざまなジャンルの曲を使って、人物の性格を語り、オペラと同様に歌が性格を描写して、音楽とドラマの一体化をはかっている。そしてプレスリー以前であるものの、「昔々一人の男がいた」は白人の歌うカントリー・ウエスタンであると同時に、黒人音楽から学んでプレスリーが始めたロック音楽の気配が感じられるのである。これもアメリカ文化の変化を示している。

この舞台は、ウエスト・エンドでは、シャフツベリー劇場で上演された。シャフツベリ劇場は、1914 年にオペラ公演にも使用される 2,392 席の大劇場として開場したが、現在は新しい舞台機構を入れるため改装されて、1,400 席の比較的小さな劇場である。『パジャマ・ゲーム』の後は 10 月から『メンフィス』公演が予定されている。今後、2014 年にはトレヴァ・ナンではなく新演出の『マイ・フェア・レディ』が、また、チチェスターからはこれもエアではなく新演出の『ガイズ・アンド・ドールズ』がウエスト・エンドで上演予定で、共にイギリス制作のブロードウェイ名作再演が期待される。また 2013 年夏観劇したオリヴィエ賞ミュージカル新作受賞舞台『トップ・ハット』は、現在全英ツアー中であり、日本では宝塚公演が 2015 年 4 月から行われるので、期待している。　　（玉崎　記）

⑳ 2014 年冬ロンドン（＆ストラットフォード・アポン・エイボン）演劇事情

何年か振りで冬のロンドンを訪れた。1 月末から 2 月初めにかけての 5 泊という短い滞在である。今冬イギリスでは異常気象のため雨の日が多く、特に南西部は広範囲にわたって洪水に見舞われている。ロンドンも、青空がのぞく日もあったが、雨の多い、ひどく寒い天候であった。今回の目的は、この冬、ロンドンの Shakespeare's Globe 座の敷地に新たに建てられた Sam Wanamaker Playhouse の柿落しとして上演された John Webster の The Duchess of Malfi, National Theatre で上演された Shakespeare の King Lear, Noel Coward 劇場で上演された Shakespeare の Henry V を観ることであった。

ロンドンに着いた翌日 1 月 30 日㈯に King Lear を観た。今シーズン（1 月 14 日から 3 月 25 日）のこの公演のチケットの一般前売りは昨年 11 月 29 日に始まった。その日までは National Theatre の会員のみが前売り券購入の権利を与えられていた。筆者は会員登録をしていなかったが、National Theatre から「ニュース・レター」を送ってもらっていた。National Theatre のウェブサイトを見ていると、「ニュース・レター」の読者には一般前売り開始の 1 日前にチケット購入申し込みの権利を与える旨、小さな文字で書かれていた。これを利用しない手はないと、現地 11 月 28 日のブッキング・オフィス営業開始時間にあわせてインターネット予約をしてみた。驚いたことにチケットはほぼ完売。一般前売り前に会員が購入してしまっていた。売れ残っていたのはわずか 4 枚。しかも筆者がこの公演を観るために空けておいた唯一の日 1 月 30 日（滞在中のほかの日にはすでに他の公演のチケットを購入していた)、この日だけに 4 枚のチケットが売れ残っていた。ウェブサイトの小さな記事に気付かず、一般前売りの日に申し込んでいたら、恐らくチケットは手に入らなかっただろう。こ

の稀有の幸運に感謝しながら、チケット購入のボタンをクリックした。その後、次のシーズン（5月28日まで）のチケットが発売されたが、こちらも完売であった。The Duchess of Malfi と Henry V のチケットはかなり早い段階で前売り券を買ってあったが、こちらも、ロンドンへ来てみると、千秋楽までチケットはすべて完売であった。冬の夜長、イギリスの人々はこれはと思う劇には足を運ぶのだろう。ロンドン滞在中、もう1演目、チケットの入手が困難であった公演があった。Donmar Warehouse で上演されていた Coriolanus である。この劇場は収容数が少ないこともあって、開幕と同時に会員によってすべてチケットは購入されてしまった。ただ、この公演はイギリスのいくつかの映画館で観ることができた。というのは、National Theatre が創立50年を記念して、"National Theatre Live" というイベントを立ち上げ、National Theatre が上演している劇の中からいくつかの作品を世界中の（とはいえ、ほとんどが英語圏。日本では2月から Frankenstein を皮切りに随時上演されることが決まっている）映画館で、劇場での上演をそのままライブで上映することになった。National Theatre が制作し現在 New London 劇場で続演している War Horse が2月27日に、また、現在 National Theatre で上演されている King Lear も5月1日に上映されることになっている。Donmar Warehouse は、National Theatre の協力を得て、1月30日に、人気の高い Coriolanus をイギリス各地の映画館で上演したのだ。残念ながら、筆者はこの上演を観ることはできなかった。この日、National Theatre の座席に座り、King Lear を楽しんでいた。

今回の King Lear がこれほどまでに人気があったのは、Sam Mendes が演出を担当し、主役の Lear 王を Simon Russell Beale が演じたからである。今やそれぞれイギリスを代表する演出家・映画監督と役者となったこの二人の出会いは、1990年、弱冠24歳で Royal Shakespeare Company に参加し、91年、93年、94年と立て続けに、Troilus and Cressida, Richard III, The Tempest の演出を手掛けた Mendes が Russell Beale を起用した時に始まる。この時、Thersites, Richard 三世、Ariel を演じた Russell Beale は大型新人として鮮烈な印象を観客に与えた。特に、The Tempest の最後で、Prospero から解放された Ariel が、これまでの怨念を晴らすかのように、Prospero の顔に唾を吐きかけたシーンは今でも鮮やかに目に焼き付いている。その後も Donmar Warehouse の芸術監督として活躍した Mendes は、Anton Chekhov の Uncle Vanya, The Cherry Orchard, Shakespeare の Othello, Winter's Tale, Twelfth Night で Russell Beale を再び起用した。この二人が、Shakespeare 7作目になる今度の公演で、どのような King Lear を見せてくれるのか。観客の期待は大きく膨らむ。

劇場に入ると、すでに幕は上がっていて、舞台奥の壁中央に、炎を発する太陽が映し出され、壁左手に同じように映し出された地球が、少しずつ太陽に近づいていく。開幕の時刻になるころまでには、金環蝕のように、二つの球が重なる。それが何を表すのかは劇が終ったときはっきりするが、劇の始まる前に、すでに舞台は動いている。舞台中央には、日本の劇場の花道のような細い道が観客席にまで延び、役者の入退場に使われる。

時代は現代、Stalin 時代のソ連や現在の北朝鮮を彷彿とさせる独裁政権下、いかにも独裁者然とした Lear が、軍服を着て登場、国土3分割の儀式を行う。何故か、Lear が末娘 Cordelia に抱いて

いるはずの愛情が伝わってこない。これほど暴力的で、冷徹に演じられた Lear は見たことがない。冷徹さゆえに、長女、次女から虐待を受け、荒野へ投げ出されて、これまでは知る由もなかった人間の実相を思い知らされ、次第に狂気の様相を呈した Lear は突然に Fool を撲殺する。予想さえしなかった Fool 撲殺を目の当たりにした観客からは驚きの声が上がる。確かに原作でもこの嵐の場面以降、Fool は舞台に登場しない。Fool は Lear の愚行を批判し、Lear を自己覚醒へと導く役割を担っているのだから、それが達成される嵐の場面以降、Fool が舞台にいる必要がなくなるので、Shakespeare は Fool を登場させないのだという解釈がなされてきたり、Shakespeare の時代、恐らく Fool と Cordelia は同じ役者が一人二役で演じていたので、Cordelia の登場する機会が少ない劇前半は Fool として登場できるが、Cordelia が何度も登場する後半では Fool として登場することができず、従って、Shakespeare は嵐の場面以降 Fool を削ったのだという解釈がなされたりしてきた。Lear は最後の場面で殺害された Cordelia を前に "And my poor fool is hang'd" と語る。もちろんこの fool は Cordelia を指すのだが、後半に Fool を登場させなかった Shakespeare は「フールも殺害されてしまった」と Lear に語らせ、Fool 退場の辻褄を合わせようとしたという解釈もある。King Lear という作品のアポリアの一つと考えられてきたこの課題に、Mendes ははっきりとした解釈を提示したことになる。Fool は退場するのではなく、Lear に殺害されたのだと。これほどの暴力と狂気とに憑りつかれた Lear 対する観客の共感は妨げられる。この暴力と狂気は、Cornwall と Regan が地下のワインセラーとおぼしき所で、コルク抜きを使って、Gloucester の両眼を刳り貫く場面で増幅される。Mendes は Lear に対する共感を呼び起こすことを考えてはおらず、この暴力と狂気とをこそ描こうとしたのかもしれない。最終場、Cordelia の亡骸を前にした Lear は Cordelia が息を吹き返したと勘違いして狂喜の内に息絶えるといった、これまで何度も目にしてきた演出は、Mendes には無縁のものだ。彼の King Lear は暴力と狂気に満ち溢れており、そこには救いがない。ただあるのは、最後に Edgar が言う通り、この悲しい時代の重みに耐えることだけである。これまで、Mendes の演出による Shakespeare 作品の中で、Russell Beale が演じてきたのは、Thersites, Richard 三世、Ariel, Iago, Leontes, Malvolio といずれも屈折した心を持った人物たちであった。強権を発揮できる独裁者から転落し、狂気を経て、何も持たない裸同然の人間観を持つに至る Lear 像は、この Russell Beale が演じるにふさわしい。Mendes は Russell Beale を得て、自分の King Lear を創造することができた。ただ、Mendes の描く Lear の世界は暗い。開幕前のあの金環蝕のようにこの地から光を奪う。劇を見終わって劇場をあとにする観客たちの足取りも心なしか重い。

2 月 1 日㈯のマチネーで Henry V を観た。演出は、現在イギリスでもっとも注目されている演出家の一人、Michael Grandage である。彼は一昨年 12 月から今年の 2 月まで、「ウエスト・エンド・シーズン」と銘打って、5 つの作品を連続上演してきた。それぞれの上演作品に一人ずつ実力派の俳優を配した。1 作目、Peter Nichols の Privates on Parade には Simon Russell Beale を、2 作目、John Logan の Peter and Alice には Judi Dench を、3 作目、Martin McDonagh の The Cripple of Inishmaan には Daniel Radcliffe を、4 作目、Midsummer Night's Dream には Sheridan Smith を起用した。そして最後 5 作目の Henry V では Jude Law がヘンリー五世を演じた。Grandage はシェ

フィールドの劇場で演劇活動を開始し、2002 年から 2012 年まで Donmar Warehouse で演出し、その後ウエスト・エンドへ進出した。新たに Michael Grandage Company を結成し、今回の「ウエスト・エンド・シーズン」に臨んだ。座席数 940 の Noel Coward 劇場でのこの公演に多くの人が来場できるように、1 枚 10 ポンドのチケットを 10 万枚用意したという。来場者の 30 パーセントが初めて劇場へ足を運んだ人だそうだ。Law が Grandage の演出で Shakespeare を演じるのはこれが 2 回目である。2009 年にハムレットを演じている。この時もチケットの入手が困難で、当日の「リターンド・チケット」を求めて、朝から劇場の回りを多くのファンがとりまいていた。筆者もチケットを入手できなかったので、Law を舞台で観るのは今回が初めてである。イギリスでは、Shakespeare 役者は Henry 五世を演じ、そのあとで、Hamlet を演じるのがふつうだが、Law の場合は順番が逆になってしまった。映画では Laurence Olivier と Kenneth Branagh, 舞台では Mark Rylance (Shakespeare's Globe 座）と Adrian Lester（National Theatre）の Henry 五世を観たが、Law はどのような Henry を見せてくれるのか。

舞台は後方をぐるりと半円形状にライム色の高い壁でおおわれている。すぐにそれがエリザベス朝の舞台の "Wooden O" を象徴していることがわかる。この空間がこれから観客の想像力によって宮廷にも戦場にも城にもなる。そこへコーラス役の役者が登場し、プロローグを語り始める。他の登場人物たちが全員当時の服装で登場するのに対し、彼だけユニオン・ジャックが描かれた T シャツを着ている。その彼によって我々観客が生きている現代と時代を隔てた劇中の世界とが架橋される。

Shakespeare の歴史劇はもちろんイギリスの歴史を題材としている。若いときの放蕩生活から立ち直り、アジンコートの戦いでフランスに勝利した名君として、Henry 五世は今でも多くのイギリス人から慕われている。部下を鼓舞する Henry の有名な台詞を好んで暗唱するイギリス人にもこれまで何人か出会った。確かに Olivier の映画では名君による国威発揚が意図されていて、その目的に沿わない台詞はかなりカットされている。しかし、Shakespeare の描く Henry 五世は単に名君であるだけではない。公人と私人とのジレンマに苦悩する人物であり、かつての仲間を放逐したりフランス兵捕虜の殺害を命じたりする冷酷さをも併せ持った複雑な人物である。そこのところをきちんと描かなければ Shakespeare の Henry 五世を描いたことにはならない。Law は Henry 五世を淡々と演じていたので、時に威厳をもって臣下に接し、時に苦悩し、時に冷酷な行動をとる国王像を深く演じきっているようには思えなかった。フランス皇太子から、その若さゆえ侮られる Henry を演ずるには、今年 40 歳になる Law は少し若々しさに欠けるようにも感じた。Henry V がウェスト・エンドの商業劇場で上演されたのは 1938 年以来初めてのことだという。今、何故、Henry V なのか。Grandage の意図が掴みきれなかった。

今回のロンドン訪問の最大の目的である Sam Wanamaker Playhouse での The Duchess of Malfi は 2 月 2 日㈰のマチネーで観ることができた。テムズ川の南岸に、Shakespeare が活躍していた Globe 座を再建しようとした Sam Wanamaker の夢は、1997 年に現実のものとなった。Shakespeare's Globe 座の誕生である。残念ながら Wanamaker は劇場の完成を待たず、1993 年に他界した。誕生以来今日に至るまで、この劇場がイギリスの演劇界に与えた影響は計り知れない。

Shakespeare をはじめとするエリザベス朝・ジェイムズ朝の劇作家たちの作品を現代の観客に近づけた功績は大変大きい。Shakespeare's Globe 座の 2013 年度 Annual Review によると、実施した 283 公演に 60 万人以上の観客が集まり、この観客数はロンドンの劇場全体の観客数の 11 パーセントを占めるという。ただ、この劇場には一つだけ欠点があった。当時の劇場と同じく、青天井であるために、これまで夏シーズンしか上演が行われなかった。この欠点を克服すべく、室内劇場の建設が計画された。Wanamaker は Shakespeare's Globe 座を計画した当初から、屋外劇場とは別に室内劇場を建設する予定であったという。Shakespeare's Globe 座の正面玄関を入ったホワイエ左手に室内劇場が誕生した。劇場名は Sam Wanamaker Playhouse。Globe 座の再建に生涯をささげた Sam Wanamaker に因んで命名された。1960 年代後半、オックスフォード大学、ウスター・カレッジで最も初期のものと思われる室内劇場の図面が発見された。はじめ Inigo Jones の設計と考えられたが、のちに、彼の弟子の John Webb の手によるものだと考えられるようになった。この図面やその他の最新の研究成果をもとに Sam Wanamaker Playhouse は設計された。昨年の 11 月 19 日に完成し、パトロンである Edinburgh 公 Philip 殿下を迎えて開場式典を行い、1 月 9 日から 2 月 16 日まで、John Webster の The Duchess of Malfi が柿落しとして上演された。

この劇場は座席数 340 の小さな劇場で、客席は 2 層、U 字形に舞台を囲む。1 階客席中央は通路になっていて、役者たちの入退場に使われる。役者はこの通路を通って、舞台前方左右のステップから舞台に上がる。舞台そのものは 5×10 メートルほどの小ささである。舞台奥も当然出入口になっていて、役者が入退場する。特徴が二つある。一つは、劇場が小さいために、1 階の客席に座ると手の届くところで、役者が演技するので、劇そのものにコミットしやすいこと。もう一つは、照明がキャンドルだけによることである。客席の背後には窓があるので、外部からも十分とは言えないまでも明かりをとることはできるが、場面によっては、その窓のスライドが閉じられて、外からの明かりを遮断する。その時の照明は天井から下がった 7 つの燭台（1 つの燭台には 12 本のキャンドルがついている）と柱に取り付けられた数本のキャンドルだけになる。そのほかに登場人物がキャンドルを手にして登場することもある。場面によって 7 つの燭台が上下する。燭台が下がってくると、2 階席の観客の視線を遮ることになる。今回は 2 階席中央からやや右の座席だったので、しばしば舞台への視線を燭台によって遮られた。

この劇場での上演第 1 号となるこの劇を演出したのは、現在の Shakespeare's Globe 座の芸術監督 Dominic Dromgoole。この劇場の利点を最も生かせる作品として The Duchess of Malfi を選んだのだろう。そもそも The Duchess of Malfi の各場はほとんどが室内に設定されていて、この劇場の狭い空間で演じられるにふさわしい。しかも Webster が描くこの作品の世界は暗澹としていて、キャンドルの明かりのもとで展開されるにふさわしい。その意味では Dromgoole の選択は正しかった。公爵夫人を演じた Gemma Arterton は 7 年前に Love's Labour's Lost で Shakespeare's Globe 座にデビューし、今回 Dromgoole に起用されて、2 回目の出演になる。Arterton は、兄たちの反対を押し切り、下僕の Antonio と秘密の結婚をする夫人を情熱的に演じてはいたが、3 年前 Old Vic 劇場で上演された Jamie Lloyd 演出の The Duchess of Malfi で公爵夫人を演じた Eve Best と比べると、

やや弱々しく、殺害される前に語る "I am Duchess of Malfi still" という有名な台詞もインパクトに欠けていた。そのほか、Ferdinand を演じた David Dawson, 枢機卿を演じた James Garnon をはじめ、一人ひとりの役者が自分の役を見事に演じていたが、特に Bosola を演じた Sean Gilder の演技には感心した。4 幕で殺害されてしまう公爵夫人に代わって、最終幕で活躍するのは Bosola だが、作者 Webster の一番の関心は、公爵夫人ではなく、Bosola ではなかったかという筆者の主張を、深く納得させてくれた演技であった。

この日の公演の後、"Meet the Cast" というイベントが開かれた。Shakespeare's Globe 座の会員でないと参加することができないのだが、会員になっているイギリス人の友人が手配してくれて、この催しに参加することができた。Arterton, Dawson, Garnon の 3 人の役者が参加者からの質問に答えてくれた。3 人とも、この劇場の観客との距離の近さは、役者の側から見ても、大きな利点で、大変に演技しやすいと強調していた。一方で、演技の最中に、キャンドルの蝋が垂れてきて困惑することがあると語っていた。2 階席で観劇した参加者からは天井から下がっている燭台によって視線が遮られてしまうとの苦情が語られたが、キャンドルライトの使い方は目下のところ試行錯誤の最中であるとのことであった。そのほか、この作品の悲劇性について、役者と参加者の間で議論が盛り上がった。

The Duchess of Malfi のこの劇場での上演は大成功だったと思うが、次に上演を予定されている Beaumont と Fletcher の合作喜劇 The Knight of the Burning Pestle には野外の場面も多く、キャンドルライトのこの劇場で、どのような工夫がなされるのだろうか。興味が尽きない。今後、この劇場は演劇の公演だけでなく、コンサートなどにも利用されるとのことである。

以上 3 つの公演のほかに、1 月 31 日㈮には、コベントガーデン、Royal Opera House で Massenet の Manon を Ailyn Perez の熱唱で堪能し、2 月 1 日㈯は、マチネーで Henry V を観た後、夜の公演で、ミュージカル Billy Eliott を観て、子供たちの素晴らしいバレーを楽しんだ。　　(酒井　記)

⑫ 2014 年夏ロンドン（＆ストラットフォード・アポン・エイボン）演劇事情

今夏もイギリスを訪れ、ロンドンとストラットフォード・アポン・エイボンで併せて 15 の作品を観てきた。主に Shakespeare 劇と彼と同時代の劇作家の作品を観たが、その他にも話題になっていた作品を観ることができた。昨年の夏も感じたことだが、このところ、ミュージカルよりもドラマの上演の方にエネルギーが感じられる。演劇ガイド Official London Theatre に掲載されている上演作品の数からもそれがわかる。ドラマが 24 作品、ミュージカルが 18 作品である。今年もまだミュージカルに閉塞感があることは否めない。昨年の「2013 年夏ロンドン演劇事情」に「フェミニズムの復活とまでは言えないものの女性を主人公とした作品の上演が目立った」と書いたが、今年も、女性演出家、女優の活躍が著しかった。それぞれの上演の観劇録を記し、今夏のイギリス演劇事情の一端を明らかにしたい。

Old Vic 劇場で、南アフリカ出身の女性演出家 Yael Farber による、Arthur Miller の The Crucible を観た。Farber は 2 年前、August Strindberg の Miss Julie からの翻案作品 Mies Julie を Riv-

erside Studio で発表し、センセーショナルな大成功を収めた。Mies Julie では作品の時代背景を祖国南アフリカの現代に移し、アパルトヘイト後もなお続く祖国における人種差別、性差別を告発したが、今回は、1692 年のマサチューセッツ州セイラムを舞台にした Arthur Miller の原作に忠実に従っている。劇場内に入ると、Old Vic の見慣れた舞台がすべて取り払われていて、まず驚かされる。役者たちが演じる場所は一階客席と同じフロアー。客席の中ほどに演技する空間が作られ、取り払われた舞台の場所も客席になっていて、観客はこの空間を取り囲むようにして、この劇を観ることになる。いや、観るというよりも、ここで繰り広げられる魔女裁判に参加することを要請されるかのようだ。ここが劇場であることを観客に意識させないようにするためか、2 階バルコニー席のきらびやかな装飾はすべて布で覆われ、劇場の華やかさが消し去られて、これからここで繰り広げられる暗澹たる世界を暗示している。登場人物が纏う服も、ややコミカルなところのある Giles が纏うやや茶のかかった服を除くと、すべて黒に統一されていて、劇全体のトーンを作り上げるのに寄与している。告発側と被告発側の間に立って苦悩する Hale 牧師の描き方に物足りなさを感じたが、John Proctor 役の Richard Armitage, 妻 Elizabeth 役の Anna Madeley, Abigail 役の Samantha Colley らの熱演もあって、非常に緊張感の溢れる、優れた上演であった。時代設定を変えずに上演しても、この時代に The Crucible という作品を取り上げるということは、昨今の宗教的ファンダメンタリズムがいかに人間性を蹂躙しているかという思いに、観客の意識を向かわせることになると感じた。演出した Farber の狙いもそこにあるのかもしれない。客席は満席で、若い人の姿も目立った。ストレートプレイには珍しいことだが、終演時に観客からのスタンディング・オベイションが起きた。生前の Arthur Miller は、自分の作品が本国アメリカよりもイギリスで広く受け容れられていることを喜んでいたが、The Death of a Salesman, All My Sons をはじめとして、確かに Miller の作品はイギリス人に好まれている。

Noel Coward Theatre で Shakespeare in Love を観た。今夏は優れた上演がいくつもあったが、これもそのうちの一つ。Shakespeare in Love といえば、1998 年に大ヒットした Tom Stoppard と Marc Norman 作の映画をすぐに思い出すが、この映画をミュージカル Billy Elliot を手掛けた Lee Hall が舞台化したのがこの作品である。演出は今やイギリスを代表する演出家の一人、Declan Donnellan, 演じるのは彼が創設し、30 年以上に亘ってルネッサンス劇を演じてきた Cheek by Jowl である。舞台が成功し、その後映画化された作品は数多くあるが、映画の成功が先行し、その後舞台化された作品はめずらしい。1967 年に大ヒットしたアメリカ映画 The Graduate は後に舞台化されてロンドンでも上演されたが、この映画はもとはというと Charles Webb の小説を映画化したものである。小説の舞台化続いて映画化、小説の映画化続いて舞台化、小説の舞台化、あるいは、小説の映画化という例はあっても、映画の舞台化という例はあまりない。もちろん映画と劇の表現方法は大きく異なる。映画にはできるが劇にはできないこと、逆に、劇にはできるが映画にはできないことがある。そのギャップを埋めるべく様々な工夫がなされていた。7 月 19 日の The Times に Hall が記事を寄せているが、その中で彼は「映画では上手に扱えないことがある。それは詩である」と言っている。リアリスティックな映画の中では「詩」を扱うのは困難だが、舞台では可能だというのだ。現に

舞台では、映画よりも、Shakespeare の詩行が語られる場面が多い。登場人物の中では、映画よりも、Christopher Marlowe が重視されていて、Romeo and Juliet の成立に力を貸すだけでなく、バルコニー・シーンでは、Shakespeare に付き添って、Viola de Lesseps へ語りかける愛の言葉を Shakespeare に伝授する。劇の最後では、亡くなったはずの Marlowe が現れ、Shakespeare はこれから書くことになる Twelfth Night のプロットを彼に語り聞かせる。こうすることで、Shakespeare の多くの詩行が観客の耳に届くことになる。秀逸であったのは舞台装置である。舞台中央全面を覆うように三層のバルコニーが置かれる。一階部分には左右に開閉可能な板がはめ込まれていて、板を移動せず全面を覆っている時は、舞台前方が独立した空間になり、ここが Viola の寝室に使われたり、酒場として使われたりする。板を移動すると奥舞台まで見渡せる広い空間ができる。二階部分はもちろんバルコニー・シーンで使われる。三階部分にはほぼ常に何人かの役者が佇み、一階部分や二階部分で演じられている場面を観客のように覗き込んでいて、この作品が「劇についての劇」、メタ演劇であることを暗示している。注目すべきは、この三層の構造が舞台上を前後に移動することだ。後方に移動すると、舞台前方に広い空間ができ、ここが当時の劇場の舞台となり、役者たちが Romeo and Juliet を我々観客に向かって演じる。前方に移動すると、舞台前方の狭い空間が当時の劇場の楽屋になり、舞台後方の広い空間では、役者たちが我々観客に背を向けて Romeo and Juliet を演じる。特に最後に舞台と楽屋とが何度も入れ替わる場面ではこの装置が効果を発揮していた。Viola がバルコニーに立って手を振り、3 層の構造がゆっくりと後方に移動していくことで、アメリカに向かって出航していく船を表わすこともできる。こうして映画では一瞬にして可能な場面変換をこの構造を移動させることで実現する。映画でふんだんに描かれていた当時のロンドンの町の様子は劇では描けなかったり、当時の観客の熱狂ぶりも劇では描けなかったりするが、商業演劇にしては多い 30 人近くもの役者たちの熱演で、エネルギーに溢れた、大変に楽しい劇に仕上がっていた。宣伝のキャッチ・コピーに "The Best Comedy in London" とあったが、Shakespeare の喜劇のような重層的な深さはないものの、喜劇本来の祝祭性あふれる上演を、大いに楽しむことができた。この楽しさにもう一度浸りたくて、数日後、再び Noel Coward Theatre に足を運び、初回に劣らぬ楽しさを満喫した。夏の短い滞在中に同じ劇を 2 回観たのは、10 年ほど前に National Theatre で上演された Arthur Miller の All My Sons 以来のことだ。

その National Theatre で、Euripides の Medea を観た。演出は女性演出家 Carrie Cracknell。Cracknell と言えば、昨夏、Duke of York's Theatre で観た Ibsen の A Doll's House の演出家である。夫の家父長的な支配から逃れようと、子供を顧みずに家出する Nora といい、夫の裏切りに、自分たちの間に生まれた二人の息子を殺害することで、復讐しようとする Medea といい、この演出家は、極限的状況におかれた女性に、同情と共感とを抱いているようだ。Medea はこれまで Diana Rigg や Fiona Shaw などイギリスを代表する女優達が演じてきたが、今回演じるのは、実生活でも 2 人の子供の母親である Helen McCrory である。彼女はすでに舞台女優として名声を確立し、映画（たとえば Harry Potter）にも出演しているが、今回の Medea の演技を 8 月 4 日の The Sunday Times は「目下の演劇的出来事」と称して高く評価している。Cracknell は時代を現代に移し、

Medea の住居も別荘風の建物で、裏庭にはブランコがあって、二人の子供がそこで遊ぶ。幕が開くと二人の子供が床に寝転がりながら、テレビに見入っている。父親 Jason が登場して、二人の子供と一緒にデジカメで写真を撮るシーンも挿入される。こうした現代の日常生活的なシーンを取り入れることで、この悲劇の現代性を強調しようとしていると思われる。13 人の女たちがコーラス役を演じる。女性のコーラス役はこの演出家の意図によるものと思ったが、原作にあたると、コーラスは「コリントスの女たちよりなる」とあり、原作に従ったものであることが分かった。コーラス役の 13 人は薄い衣装をまとい、台詞を輪唱のように歌い上げるが、歌よりはバレエで自分達の感情を表現していた。この劇では乳母がコーラス役を果たしていた。建物の二階部分はガラス張りになっていて、内部が見て取れる。原作にはない Jason と Corinth の王 Kreon の娘との結婚パーティーがここで開かれ、新妻が毒を塗られた衣を纏って死ぬ場面もこの二階部分でダンスによって表現される。最後は Medea が、龍が引く車に乗って、死んだ二人の息子と一緒に天空へ消えてゆくことになっているが、この演出では、二人の息子の遺体を布袋に入れ、それを両肩に担いで深く悲しみ、Jason への愛憎を語りながら退場する。原作の台詞もかなりけずられていて、上演時間 90 分という演出であったが、McCrory の熱演に引き込まれ、密度の濃い悲劇を堪能した。

この National Theatre で 2012 年 8 月に上演され、好評を博したために、2013 年 3 月にウエストエンドの Apollo Theatre で続演されたのが、The Curious Incident of the Dog in the Night-Time である。今夏は同じウエストエンドの Gielgud Theatre で上演されていた。2013 年の暮れに Apollo Theatre で上演中、劇場の天井の一部が落下し、折しもクリスマスの贈り物としてこの劇を観ていた少年少女をはじめ 70 人の観客が負傷するという惨事が起きた。その後、Gielgud Theatre に移して上演されることになった。Mark Haddon の同名の小説の Simon Stephens による舞台化である。小説は 2003 年の Whitbread Book Awards の The Book of the Year 賞を受賞し、イギリス人の間でよく読まれている。200 万部のベスト・セラーとなった。劇の方も上演された 2012 年の Olivier Awards で演出、主演男優、助演女優など 7 部門で受賞した。演出は今夏も続演している War Horse を手掛けた女性演出家 Marianne Eliott である。アスペルガー症候群（小説にも劇にも明確な言及はない）を抱えているとみられる 15 歳の少年 Christopher が、隣人の犬が殺害されているのを発見し、その犯人捜しをするというスリラー仕立ての劇である。他人から体に触れられることを極度に嫌がる Christopher は、警官からの尋問中、体に触れられて、逆に警官を殴って逮捕されたりしながらも、次第に犯人に近づいていく。犯人捜しの過程を Christopher は日記に書き記すが、劇では、それを養護学校の先生 Siobhan が観客に語り、それと同時に、語られる内容が舞台上で演じられて行く。2 年前に死んだとされていた母が生きていること、犬殺害の犯人は父親であったこと、しかも、母は夫以外の男とロンドンに住んでいること、父親が殺した犬の持ち主はその男であったことが明らかになる。こうして Christopher に隠していた嘘がすべて暴かれる。Christopher の母は家を出た後、何通もの手紙を彼に宛てて書き送っていたが、すべて父親が Christopher の目に触れぬよう隠していた。それを捜し出して、手紙の住所を頼りに、Christopher は生まれて初めて一人で地下鉄に乗り、母に会いにゆく。犬を殺した父親に今度は自分が殺されると恐れおののく Christopher は、男とも

別れた母親と一緒に二人でロンドンでの生活を始めていく。人並み外れた数学の天分を与えられている Christopher は数学の A レベル・テストを最優秀の成績でパスし、大学に進学して科学者の道を歩む決意をする。現実の世界でいろいろな生きにくさを感じながらも、希望を抱いて生きていこうとする Christopher を演じた Luke Treadaway の熱演は高く評価されていい。演出にも工夫が施されている。舞台両サイドに小さな箱型のユニットがいくつも重ねられていて、中にはプラモデルの列車のための線路の部品や駅の模型が入っている。Christopher はその箱の中から次々と部品を取り出して、舞台狭しと線路をつないでいく。劇が終盤に近付くと線路が完成し、幕が下りるころには、その線路の上を列車が走る。それと同時並行的に、苦しかった Christopher の犯人捜しと母親探しが終わり、列車が走るように、将来に向かって Christopher もまた走り出すことを予感させる。音楽と照明によって Christopher の内面が見事に表現されていたのにも感心した。

ロンドンで Shakespeare 劇を 5 作品観ることができた。Shakespeare's Globe で King Lear, Julius Caesar, Antony and Cleopatra, Tristan Bates Theatre で Troilus and Cressida, Trafalgar Studios で Richard III の 5 作品である。

Shakespeare's Globe ではまず King Lear を観た。出演者はわずか 8 人、ほかに舞台係が 2 人、総勢 10 人の小規模な上演であった。8 人で演じるために、一人の役者が何役も兼ねていて、たとえば Edmund と Oswald を一人の役者が演じ、帽子をかぶれば Oswald に、帽子を脱げば Edmund になるといったことが何度も起きた。役を兼ねないのは Lear だけだが、その Lear も黒人の小柄な役者が演じていて、観ていて違和感が消えなかった。Lear の最後の台詞 "Look there, look there" は、死んだ Cordelia が生き返ったと錯覚した Lear が、回りを囲む Edgar, Kent らに Cordelia を見ろと言っていると解釈できるが、この演出では、Lear はこの時，天に向かってこの台詞を語っていた。とうとう最後まで Lear の世界に入り込むことができなかった。Shakespeare's Globe での観劇では、我々観客は舞台の世界に取り込まれてしまうことがしばしばあるのだが、今回は珍しくそのような体験をできなかった。見終わってから知ったのだが、今回の演出は国内ツアーで演じるためのもので、そのために出演者も最小限の 8 人に抑えたとのことであった。それにしても、4 人の出演者が赤い布の四隅をもって、布を揺らすことでは、この作品の壮大な嵐の場面を表現することはできない。1 月の National Theatre での Simon Russell Beale 演じるショッキングな King Lear を観た後では、何とも貧弱な舞台であった。

Julius Caesar はこの劇場の総監督 Dominic Dromgoole の演出である。開演前、入り口で切符を提示して中庭に入ると、劇場はまだ開場していないのに、何人もの役者たちが、開場を待つ観客に陽気に話しかけてくる。すでに観客は Caesar の勝利に沸き立つローマにいることになる。劇が始まる前から観客を劇の世界に取り込もうとする Dromgoole の演出の一部なのだ。上演中に観客をもローマの群衆として取り込もうとする演出はこれまでにも何度も試みられてきたが、それを超えて、劇が始まる前から観客を取り込もうとする試みは初めてのことではないか。もう一つ面白い演出が見られた。Caesar を演じた George Irving は殺害された後は出番がないわけだが、劇の終盤、Brutus の自害に手を貸す Strato として登場する。Brutus が Strato に握らせた剣に身を投げて自害するとき、

Strato は Brutus の顔を観ながらニヤッと笑ったように見えた。Caesar 自身によって Brutus が復讐されたかのように。Caesar 役の Irving のせりふが非常に聞き取りにくかったこと、Antony 役の Luke Thompson が若すぎて、民衆を説得するだけの力量を感じられなかったことを除くと、納得のいく重厚な舞台になっていた。

Antony and Cleopatra で Cleopatra を演じたのは Eve Best である。彼女は 2005 年 Hedda Gabler でタイトル・ロールを演じてその年の Olivier Awards の主演女優賞を獲得、その後、2012 年には Old Vic で The Duchess of Malfi のタイトル・ロールを演じて高く評価された。また演出家として昨年、Shakespeare's Globe で Macbeth を演出している。今イギリスで注目されている女優・演出家の一人である。Best 演じるエジプトの女王は非常に魅力的であると同時に、土間の観客の一人を捕まえて、その頬にキスするという茶目っ気も併せ持っていた。これまで観た演出では、Antony は、しばしば、いい年をして一人の女に翻弄される何とも情けない人物として観客に印象付けられていたが、Clive Wood 演じる Antony からはそのような印象を受けることはなく、むしろ雄々しく死へと赴く武将として造形されていた。

今年は Shakespeare が生まれた 1564 年から数えて 450 年の節目の年にあたる。それを記念して、Shakespeare's Globe では "Shakespeare at 450" と銘打って、さまざまな企画が立てられている。Stanley Wells, James Shapiro, Lisa Jardine など著名なシェイクスピア学者による講演会、Shakespeare とその同時代の劇作家に関する優れた研究書に贈る Book Award, 従来から行われてきた "Read Not Dead" という名称のテキスト・リーディング、さらには、さまざまな演劇教育のワークショップなどが開催されている。Shakespeare's Globe は Shakespeare 劇の優れた上演を多くの人に提供するだけでなく、ロンドンにおける Shakespeare 演劇の一大拠点としての地位を不動のものにしている。

昨夏、Tristan Bates Theatre で Elizabeth Cary の The Tragedy of Mariam が上演されたが、この作品を上演した Lazarus Theatre Company が昨年同様 Camden Fringe Festival への参加作品として Troilus and Cressida を上演した。Lazarus は "Our World at War" と銘打って Coriolanus と共に 2 つの作品で Festival に参加していた。Mariam はあまり上演されないからか、満席であったが、今回の Troilus and Cressida は、16 人の登場人物に対して観客はわずか 25 名であった。舞台が狭いので、役者は大きな演技ができず、演技するというよりは、台詞を聞かせていた。トロイとギリシャの戦闘はほとんど省略され、Troilus と Cressida のエピソードを中心に構成されていた。舞台真ん中に細長いテーブルが置かれ、登場人物たちはテーブルに据えられた椅子に座り、自分の出番になるとテーブルの上に乗って台詞を語っていく。時代も現代に置き換えられていて、最後は、Troilus が Cressida の裏切りを目撃して、ギリシャ陣営からトロイ陣営へと戻ってきたところで、戦闘機による空爆の轟音が入り、幕となった。Shakespeare 劇を観たというよりは、新しい実験劇を観たような不思議な体験ではあった。若い役者たちの必死さは伝わってきたが、「戦闘中のわれらが世界」が描けているとは思えなかった。

Trafalgar Studios では Richard III を観た。舞台は 1 階客席と同じ平面で、舞台後方にも客席が

設けられている。いくつかの大きなテーブルやデスクが置かれ、戦時中の参謀本部といった雰囲気が窺えるが、劇の最初の有名な台詞 "Now is the winter of our discontent" に 1978 年から 79 年にかけてのイギリスの Winter of discontent が含意されているようにも見える。デスクの上にはテレビが置かれているかと思うと、Hitler 好みの Wagner が流されていて第二次世界大戦を彷彿とする雰囲気もあり、時代をいつに設定したのかが分かりにくい。舞台左手の壁にかかった写真には大きく X が印されている。その写真の前に、劇が始まる前から、老女がじっと座り込んでいる。劇が始まると、写真は Henry 六世であり、老女は彼の妻 Margaret であることが分かる。写真は Richard が王位に就くと、Richard の写真と替えられる。Margaret は Richard をはじめヨーク家の者たちに呪いをかけた後、最後まで舞台にたたずみ、時にはお茶を飲みながら、その呪いが一つずつ成就するのを眺めている。劇全体が Margaret の呪いの実現という設定になっている。妻の Anne を電話のコードで絞殺したり、Clarence を熱帯魚の入った水槽で窒息死させたり、Rivers を注射針を使って毒殺したり、Richard の残忍ぶりを視覚的にも表現していた。Richard を演じたのは、BBC ドラマ Sherlock Holmes で Dr. Watson を演じたり、映画 The Hobbit に出演したりしてイギリスでも人気の高い Martin Freeman である。小柄な役者だが、Antony Sher や Simon Russell Beale が演じた Richard ほどの極悪人ぶりではないないものの、非道な Richard 像を大きく演じていた。時代を現代に設定したために、Richard の最後の台詞 "A horse! A horse! My kingdom for a horse" が切実な叫びとして観客に届いてこず、むしろコミカルなものになっていた。全体的には、非常にテンポよく、悪の跳梁する世界が描かれていて、今回ロンドンで観た Shakespeare 劇の中では一番刺激的であった。

2014 年は John Webster にとって画期的な年となった。1 月に、Shakespeare's Globe の一角に創設された屋内劇場 Sam Wanamaker Playhouse で、柿落しとして、The Duchess of Malfi が上演されたことをきっかけに、Webster に対する関心が一気に深まったのである。5 月には 2 夜に亘って BBC テレビが Webster を取り上げた。24 日は "Mysterious Mr. Webster : BBC Arts at the Globe" という番組で劇作家 Webster の人物像と彼の生きた時代を紹介し、25 日は "The Duchess of Malfi : BBC Arts at The Globe" という番組で、Sam Wanamaker Playhouse で上演された The Duchess of Malfi が放映されて、Webster と彼の代表作が広くイギリス人の間に知れ渡った。ロンドンの西部、イーリング地区にある Questors Theatre でも、The Duchess of Malfi が上演され、後述するように、ストラットフォード・アポン・エイヴォンでも Royal Shakespeare Company が、彼のもう一つの代表作 The White Devil を上演した。

ロンドンでも New Diorama Theatre で The Duchess of Malfi が上演された。この劇場は客席数 70 ほどの小さな劇場で、舞台は客席の平面の延長上にある。舞台の奥の壁面にトンネルのような絵が描かれ、舞台前方に吊るされたカーテンが開かれると、この絵が観客の目に飛び込んでくる。この閉所恐怖症的な劇を広い空間に放とうとするかのように、トンネルの奥に小さな出口が描かれているが、あまり効果的に作用しているとは思えなかった。登場人物は 9 人、カーテンの開閉役や死刑執行人など性格を表す必要のない役は白い仮面をつけて登場する。Tristan Bates Theatre と同じように、演技のための空間があまり広くないので、大きな演技は期待すべくもないが、動きは少ないものの、

非常に凝縮された舞台になっていた。大きな舞台よりはこのような小さい舞台で上演するにふさわしい劇なのかもしれない。Stephen MacNeice は昨年 Mariam で Herod を演じているの観たとき、いい役者だと思ったが、今回も、この劇にとって重要な役である Bosola を見事に演じていた。

ストラットフォード・アポン・エイボンに移動して、Royal Shakespeare Company による 5 作品を観た。Royal Shakespeare Theatre で Shakespeare の Henry IV Part I, Henry IV Part II と Two Gentlemen of Verona, Swan Theatre で Thomas Dekker と Thomas Middleton の合作 The Roaring Girl, そして John Webster の The White Devil である。

今夏ストラットフォードで楽しみにしていたのは、Henry IV Part I & Part II で Antony Sher が Falstaff を演じるのを観ることであった。演出は Royal Shakespeare Company の芸術監督 Gregory Doran。彼は昨シーズン David Tennant を主役に Richard II を演出したが、今シーズンは Shakespeare の歴史劇探究を目指して Henry IV 二部作を手掛けた。

劇場全体がいったん暗くなり、舞台に薄明かりが射すと、開幕である。天井から、正面にキリストの像、頭上には 6 台のシャンデリアがぶら下がり、舞台上にはステンドグラスを通した光があてられる。ここは教会の祭壇である。僧服を纏った人物が、両手を広げ、うつぶせになって、教会の床に全身を投げ出し、必死に祈っている。その人物がやおら、祈りが届かないかの様子で立ち上がって、僧服を脱ぎ、口を開くと、その人物が国王 Henry 四世であることが分かる。Henry 四世は王位簒奪と先王弑逆に対する贖罪のために祈りを捧げていたのだ。確かにこの二つの劇は、Falstaff らとの放蕩生活に明け暮れていた王子 Hal が改心して為政者となる決意をするまでの成長物語ではあるのだが、最初のこの場面で、Doran は、この劇は Henry 四世の贖罪の物語でもあるのだということを、観客に強く印象付けようとしている。第 1 部では、国内における反対勢力との対立と王子 Hal の不行跡に思い悩む Henry 四世の苦しみが、第 2 部では改心した王子 Hal に後を託し王位簒奪に伴うあらゆる罪を担って死に臨む Henry 四世の覚悟が、Jasper Britton によって説得力をもって表現されていた。一方、策略と戦闘に明け暮れる宮廷の外では、カーニヴァルの王ともいうべき Falstaff が祝祭的な無秩序な世界へと王子 Hal を誘い込む。無責任で、どうしようもない欠陥だらけの老いた騎士であると同時に、生命力に溢れ、そして時には、人間としての悲哀をも観客に感じさせる人物である Falstaff を、Antony Sher がその演技力で見事に表現して、忘れられない上演となった。

これまで Shakespeare 劇は数えきれないほど観てきたが、今までに一度も観ていなかった作品が一つだけある。初期の喜劇 The Two Gentlemen of Verona である。今回初めて観ることができた。そもそもこの作品は上演される機会が少なく、Royal Shakespeare Theatre で上演されるのも 45 年ぶりである。この作品にはのちに Shakespeare が利用することになる、女性の男装、親による結婚妨害、森の持つ癒しの力、赦しといった様々な工夫が予兆されているが、物語に混乱が見られると考えられてきた。Royal Court の演出家として成功を重ねてきた Simon Godwin が Royal Shakespeare Company の演出家デビュー作品としてこの作品に取り組んだ。Godwin は時代を現代に設定した。「友情と愛」のテーマは時代を超えた普遍性を持つので、時代を現代に変えたところで何の不具合もないのだが、最終場の Valentine が自分を裏切った友 Proteus を赦す場面はどうしても不自

然さが残る。Valentine は Silvia との結婚を認められ、Proteus の Julia に対する思いも蘇るが、一度は Proteus に裏切られた Julia の気持ちはどうなるのか。その所を、Godwin は、劇の最後で、Proteus が Julia に近づいて行って、彼女の手を取ろうとするところで、暗転、彼女がそれに応えたかどうかを観客に伝えないままで、劇を終わらせた。こうした不自然さがあったり、Shakespeare ののちの喜劇に比べると単調で深みがないといった不満は残ったが、若さに溢れた劇に仕上がっていて、楽しむことができた。

ロンドンにおける女性演出家、女優の活躍については、すでに述べたが、それが際立ったのは、Swan Theatre における "Roaring Girls" と銘打ったシリーズである。Royal Shakespeare Company の女性副芸術監督 Erica Whyman による企画で、Shakespeare の同時代劇作家によって、女性についてあるいは女性のために、書かれた作品を女性演出家によって上演しようとするものである。The Roaring Girl と The White Devil に加えて、5 月に短期間ロンドンを訪問した時に、ストラットフォード・アポン・エイヴォンまで足を伸ばして観た作者不詳の作品 Arden of Faversham の 3 作品を取り上げよう。

Arden of Faversham の演出を担当したのは、すでに National Theatre での演出経験はもっているが、この作品で Royal Shakespeare Company にデビューした Polly Findlay である。Arden of Faversham は 1551 年にケントで実際に起きた殺人事件を題材としている。夫 Arden を殺害したのは、愛人を作り、みじめな結婚から逃れようとする妻 Alice である。男性優位の社会で、家父長的な夫の支配から逃れるために、夫殺しをしてまでも、自立を図ろうとした女性となれば、まさしく "Roaring Girls" の一人ということになるのだろうが、原作の Alice をそのようにとらえるには少し無理があると思う。まず Aden は家父長的な人物というよりは、妻から軽くあしらわれ、妻の愛人からも馬鹿にされるような人物である。何回も殺害の計画に失敗しながらも、最後には夫を殺害した Alice は、夫の亡骸を目のあたりにすると、いとも簡単に殺害を後悔し始める。そして殺人の罪で逮捕され焚刑に処せられる。原作は一つの教訓物語を語っていることになる。Findlay は Alice を 'Roaring Girl' に仕立てるために、まず時代を現代に設定し、Alice を因習に囚われない自由な現代女性として造型し直す。さらに夫 Arden を弱々しい男性というよりは強権的な男性に仕立てる。金儲けに勤しむ Arden の事務所の壁は何百もの置物の「招き猫」で覆い尽くされて、彼の金銭的強欲を表現する。こうして夫殺しの罪科を救済しようとしたのだろうが、恋人 Mosby と Alice の間の肉欲は描かれても愛が描かれないために、Alice の夫殺しは観客の共感を得ることができない。Alice を演じた Sharon Small の熱演は評価できても、この作品を "Roaring Girls" シリーズの一作品として評価することにはためらいを覚える。

それに対して、Jo Davies の演出による The Roaring Girl の Moll Cutpurse と、Maria Aberg の演出による The White Devil の Vittoria Corombona はまさしく "Roaring Girls" である。シリーズ 3 作品の演出家たちには、時代を現代に設定し直すという共通点がある。3 人とも、Shakespeare と同時代の劇作家がどのように女性を描いているかということよりも、描かれた女性が現代とどのように関わるのかを問うているのだと思う。

The Roaring Girl もあまり上演されない劇である。Royal Shakespeare Company がこの劇を Helen Mirren の主役で上演してから 30 年以上になる。Erica Whyman が "Roaring Girls" シリーズを思いついた時、彼女の頭に最初に思い浮かんだのはこの The Roaring Girl という作品だったと思うが、男性の服装をし、タバコをふかし、社会の既成概念を打ち破って大胆不敵な行動をとる主人公 Moll Cutpurse はまさしく "Roaring Girl" である。演出の Joe Davis は、劇はもちろんのこと、ミュージカルやオペラも数多く手掛けて活躍中の演出家である。彼女の演出する The Roaring Girl は音楽に溢れ、躍動感に満ちた舞台になっていて、これまでの彼女のミュージカルやオペラの演出が生かされているように感じた。Davis は時代設定を 1890 年代のヴィクトリア朝に設定する。ヴィクトリア朝の家父長的権力が強力であった社会に挑戦するという女性像を前面に出そうとしたのであろう。持参金が少ないという理由で、自分の選んだ相手との結婚を父親から拒まれ、逆に父親の勧める結婚を強要されそうになっている Sebastian に救いの手を差し伸べようとする Moll は、持前の自由奔放な行動に出て、Sebastian と恋人 Mary の結婚を成就させる。社会からの抑圧が強ければ強いほど、それに反発する Moll の行動は痛快なものになる。そのような Moll 像を描くことが Davis の狙いだとしたら、家父長的権力が現代よりさらに強力であった原作の時代を変える必要はなかったのではないか。一方で、この劇には、妻に浮気をされる Gallipot という市民が登場する。Gallipot 夫妻は、最後には、元のさやに納まるが、この劇はこのような市井の人々の日常をも描いた "City Comedy" なのだ。Moll に焦点が当てられすぎると、原作の持つ意味がぼやけてしまうのではないかと思った。男装をし、うっすらと髭を生やし、両腕に入れ墨をして、軽快に Roaring Girl 役をこなしていた Lisa Dillon の演技はよかった。

もう一つの "Roaring Girls" シリーズの作品、The White Devil を演出したのは Maria Aberg である。Aberg はこれまで数多くの演出を手掛け、Royal Shakespeare Company でも、King John と As You Like It を演出している。Aberg も時代を現代に設定している。登場人物の一人 Ludovico は "1978" という数字が縫い込まれた皮ジャケットを着ていた。舞台はほとんど裸舞台だが、奥舞台がガラスで仕切られた空間になっていて、ここで、Isabella の毒殺や Camillo の撲殺などが演じられる。音楽も現代的で、Bracciano と Vittoria の情欲の世界を描く助けになっていた。照明も Vittoria の感情を表現するときは赤が、Isabella の感情を表現するときは青が、用いられて、効果的であった。衣装はというと、これも現代的で、特に Vittoria は、Daily Telegraph 紙の劇評家 Dominic Cavendish の言葉を借りれば "Lady Gaga style" とも言ってよいほどに、派手なドレスと鬘を身に着け、しかも何回も舞台の上で着替えていた。この劇の "Roaring Girl" はと言えば、夫 Camillo を殺害し、愛人 Bracciano との情欲の愛を成就しようとする Vittotia であることは間違いのないところで、彼女が夫殺しの容疑で弾劾される裁判で、逆に、支配的な男性社会を糾弾する姿は、"Roaring Girl" の面目躍如たるものがある。しかし、驚いたことに、演出の Aberg は、どういう意図か、Vittoria の兄、宮廷における不満の徒、Flamineo を、名前も Flaminio に変えて、妹（あるいは姉）にしてしまった。Flaminio にも "Roaring Girl" の役割を演じさせようという演出意図なのだと思うが、劇が終わるまで違和感が消えなかった。実は Aberg が原作では男性の役柄を女性に

変えたのは今回が初めてではない。King John では Philip the Bastard と Cardinal Pandolf を女性に変えている。しかもこの時は大幅に原作の台詞をカットしたという。Aberg はどうやら自分の演出意図に沿って原作を手直ししてしまうことがあるようだ。今回もこの二人の "Roaring Girls" ぶりに力点を置いたために、この二人が最後に感得する "My soul, like to a ship in a black storm, / Is Driven I know not whither" や "While we look up to heaven we confound / Knowledge with knowledge. O I am in a mist" という境地を観客に伝えきれなかったと思う。

女性の企画、演出による "Roaring Girls" シリーズの 3 作品はいずれも現代に時代を移すことで、作品の持つ現代的意味を問おうとしているが、現代に移さず、そのままエリザベス朝・ジェイムズ朝の劇として上演した方が、それぞれの原作の意味を保てたのではないか、現代的意味は劇を観た観客にゆだねてもよかったのではないかと思う。その意味では、演出がやや過剰な上演であったと言ってよいかもしれない。ただストラットフォード・アポン・エイボンだけでなく、ロンドンでも、演劇の世界で女性の活躍がこれほど目立ったことは近年なかったことだと思う。　　(酒井　記)

Ⅲ．21 世紀のリージョナル・シアター ── 創造・発信・手をつなぐ公共劇場 ──

日本が好景気に沸く 1970 年代後半から 80 年代、各地の自治体が設立・運営する公立の文化施設・文化会館の建設ラッシュがおこった。利用者もさまざまで、公的な行事から貸し館としての演目の並ぶ多目的のホールで、ソフトよりもハード面が重視されていたように思われる。ところが、90 年以降、音楽や演劇専用のホールが出現し、専門スタッフを配置し、主体的な作品創造や教育普及活動を担うようになってきた。「公共」「公共圏」「公共性」と言う言葉が書物のタイトルに用いられるようになってきたのも 1990 年以降である。公立／私立という設立母体ではなく、提供する情報や活動、運営方法が公共劇場を規定していると言ってよいだろう。

平成 24 年には「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」が施行された。今年度アートクリティックにおいても、「劇場・音楽堂活性化等活性化事業」、「公共ホール演劇ネットワーク事業」などと冠せられた演目が目につくようになった。公共劇場が発信した作品・情報・活動を以下概観する。

世田谷パブリックシアターは、この間ずっと公共劇場として多彩なプロジェクトを展開し、活動モデルを提供している。芸術監督の野村萬斎は同劇場「2014/2015 ラインアップ」のパンフレットで、「公共劇場として、日本文化のアイデンティティを考えるということも含めて発進性の高い作品を創造し、劇場の財産とするという基本精神は変わらず、今年も芸術・教養・娯楽が揃ったラインアップになりました。」と語っている。劇場はたんに作品を鑑賞するところではなく、人々が集い新たな世界/社会と出会う場であり、野村の言葉を借りれば「生きていることを体験する場」としてある。

同劇場で上演された演劇作品『THE BIG FELLAH ビッグ・フェラー』(森新太郎演出)、『マクベス』(野村萬斎構成・演出)、『炎アンサンディ』(上村聡史演出)、『暗いところからやってくる』(小川絵梨子演出) はいずれも現在日本において注目されている演出家による話題作ばかりである。彼らの共通点は、欧米圏に留学して演劇を学んできていることである。海外の演劇事情に触れてきた演出家が、公共劇場のスタッフとともに早い時期から時間をかけて準備検討してきた質の高い作品は、ネットワークを組んだ他地域の公共劇場でも演じられ、多くの観客を動員した。

皮肉なことに貸し館の名鉄ホールで上演された『マクベス』だけが名古屋で観劇できた。『マクベス』はマクベス夫妻を除いた残りの役者 3 人が、役を取っ替え引っ替え演じる大胆な演出になっていた。伝統芸能、新劇、前衛劇とそれぞれ異なるバックグラウンドで修行してきた役者たちが、時間をかけて準備したと推察される美しくもおどろおどろしい舞台であった。筋もさることながら、語り／騙りや役者の変身の工夫などドラマが生来持っているおもしろさも充分楽しむことができた。公共劇場は異ジャンルを繋げ交流を促す場でもある。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT では多くの話題作が上演されたが、その中で『ビッグ・フェラー』を観た。東三河の文化拠点として昨年開館し、俳優の平田満が芸術文化アドバイザーを務める同劇場は、貸し館業についても「アーティストや劇団の発掘、人材育成の場」(同 HP) と位置づけをしている。約 780 席の中規模の劇場で、観客席の配置が前後でずれ、また高低差もあって前席の人の頭が

邪魔にならない見やすい構造であった。この作品は、イギリスからの独立を図るIRA（アイルランド共和軍）の1972年3月17日から2001年9月11日までのニューヨークでの活動をとおして、中心人物ビッグフェラーの生き様と闘いを描いている。演技の多くはアパートの一室で行なわれ、場面転換は最小限に押さえられていたが、観客を演説の聴衆に見立てたり音や映像を用いたりして細部に工夫を凝らし、観客の想像力に訴えていた。組織への忠誠と裏切り、身勝手なテロ行為に対する怒り、犠牲となった無実の人々への想い、権力者たちの嫌らしさ、家族の崩壊、変わらぬ日常性の現前と突然の死の暗示を通して、工作員たちが愛おしい存在と感じられるようになり、静かな感動を呼んだ。

こどもとおとなのためのお芝居『暗いところからやってくる』は、「かながわKAATキッズプログラム2012」の企画であったものだ。「2014世田谷キッズプログラム」で再演され、公共ホールのネットワーク事業として、愛知県内では豊橋のPLATと春日井市民会館で上演された。それを魅力ある多彩なイベントを主催している春日井市民会館に観に行った。

暗幕が引かれた会場の舞台上に、古い木造民家の室内のセットを囲むように客席が配置されていた。中学生の輝夫は、両親の離婚後母と姉と共に祖母の住んでいた家に引っ越してきたが、家の暗闇が怖くてたまらない。当初、影におびえる輝夫に対し母は、「影を消す方法を教えてあげる。光を消せばいいんだよ」と部屋の明かりを消した。母は自分自身の心に潜む闇を自覚していないふりをしている。彼に闇を恐れさせているのは、死んだ祖母とのエピソードや転校に対する不安であろう。前川知大は、舞台に闇に住むものたちを登場させ暗闇の出来事を彼らの仕業にして、不安の原因にかたちと意味を与えている。輝夫は、割り切って自分を誤魔化して生きている母と闇の住人の双方と闘わなくてはならない。暗闇に対して大人の論理と対抗して闘う輝夫少年を大窪人衛が熱演した。「子どもと大人のためのお芝居」は双方が、それぞれの立場から相手を思いやり、日常性を問い直すことを要請している。それがなければこの作品は荒唐無稽で不条理な作品のまま終わるだろう。

「キッズプログラム」は、子育てを支援し未来の文化の担い手を育てるという目的のために助成の対象になりやすく、企画されることが多いようだ。しかしネットワーク事業の作品を上演するだけでは、安易な紋切り型の催しで終わってしまう可能性がある。「紋切り型」こそ大人の論理である。同時開催の作品をより楽しむためのワークショップは大変意義深いことであると思われた。

彩の国芸術劇場は、芸術監督蜷川幸雄演出によるシェイクスピア劇を上演してきている。このシリーズは若手人気俳優を起用することでシェイクスピア劇の観客層を広げたように思われる。、関東では神奈川以西でしか上演されないため、終演時間を厳守して観客を埼玉に集め、東京の一極集中を避ける工夫もしている。

静岡の静岡芸術劇場SPACは宮城聡が芸術監督を務め、舞台作品を上演する人（劇団Spac）と場所、稽古場、レパートリー作品を有している。そして、遠方からの観客をバスをチャーターして集め、前衛的な世界の演劇の紹介と交流、演劇人の育成、明日の文化・社会を担う高校生の鑑賞教室の開催などを試み、一定の成果を得ているように思われる。一方で、予算が大幅に削減され事業の見直しを求められているというニュースも伝えられている。

確かに生活に困窮する人の増加が伝えられる社会状況で、芸術予算を見直し、縮小する方向で事業

展開を修正・再構築することは避けられず、難しい課題であろう。しかし、これは未来社会に対する展望を私たち一人ひとりがどう描くことができるか、また、演劇が社会を見つめ直す場を提供できるかと大いに関わっている。

さて、音楽シーン、オペラ上演に関しても公共劇場は大きな役割を果たしている。びわ湖ホールは専属の声楽アンサンブルを持っている唯一の公共劇場である。声楽アンサンブルのコンサートは完売が目立ち、東京でも公演されるようになってきた。ここからソリストが育ち活躍しているのも、すばらしいことである。兵庫県立芸術文化センターは兵庫芸術文化センター管弦楽団を擁し、コンサートを行い内外からの若手演奏家たちを育てている。石川音楽堂を拠点とし井上道義芸術監督の、オーケストラアンサンブル金沢も金沢歌劇座で定期的にオペラを上演している。これらに共通しているのは、有名な指揮者を芸術監督に迎えて芸術性の高いコンサートだけでなく関連したセミナーやお祭り的な催し等を企画し、クラシック音楽の多様な受容を掘り起こしていることである。

兵庫の企画は「人気」をキーワードとしているように思われる。人気者の指揮者佐渡裕、オペラの人気演目、人気歌手をバランスよく配したキャストを売りにして、夏の 2 週間にマチネ公演で上演されるオペラは、気をつけていないとチケットが売り切れてしまう。びわ湖ホールは芸術監督の沼尻竜典セレクションによって、マイナーな名曲が演奏されることがある。昨年は『死の都』の日本初演を果たした。この路線に、異を唱えるホール関係者もいるようだが、1 ファンとして安易な結論を出してほしくない。

みつなかホールはベルカント作品を、いずみホールではモーツァルト作品を、いずれも簡素な装置で制作上演し質の高い音楽を提供している。後者は芸術アドヴァイザー磯山雅の企画で、河原忠之チェンバロ指揮、粟国淳演出の、文化庁劇場・音楽堂等活性化事業と冠せられた舞台である。東西の選りすぐりの歌手が、音響の良い小ぶりの劇場で歌い音楽を堪能させてくれる。このような成功例を見ていると、オペラは総合芸術だから、装置にもお金をかけ芸術性の高い立派なものを見せる必要があるという考えは必ずしも正しくないと思われる。音楽や声を聴かせることに焦点を当てた上演がある一方で、一部音楽を犠牲にしてもドラマを見せる上演があってもよい。公共劇場は、ニーズを掘り起こして企画し、多様な音楽のかたちを提供することができる。音楽家たちの側もニーズに応えたり自分たちの作りたい音楽を求めて、既成の団体に所属しながらも別のカンパニーを組織し演奏を行う傾向が見られる。もちろんこの背景には、採算を重視したスター主義や、チャンスに恵まれない演奏家の存在があるのは否めない。

人気演奏会の「名古屋とばし」が話題となる一方で、名古屋市内の宗次ホールは、ランチタイムコンサートを 1 月間に 10〜15 回程開催し、若手演奏家に演奏の機会を与えている。必ずトークを入れ、1 時間の演奏時間を厳守することなど制約は多いが、出演者はコンサートを自ら企画する過程で、社会で何が求められているか何ができるかを自らに問い、マネジメントすることが求められる。観客と演奏家を楽しませつつ育てる場となっているのである。

例年びわ湖の春のオペラは神奈川県民ホールとの共同製作である。この種の企画では、観客は、いろいろな所属の演奏家たちのコラボレーションを楽しめ、音楽家たちは交流することによってさらに

芸術に磨きがかけられるであろう。制作費を共同で負担することによってチケット料金が抑えられているのも魅力である。公共劇場や各種団体による全国共同製作プロジェクトはかなり進んできて、2015 年には 10 都市 15 団体共同『フィガロの結婚』が野田秀樹演出、井上道義指揮で上演予定である。どのような作品に仕上がるのか大変興味深いが、公共劇場がオペラ上演に新しい波と可能性を起こしつつあるように思われる。

発信する公共劇場に出向くと、劇場が、社会の有り様を映す装置として他者との対話と交流を促し、自分自身の生きざまをも問い直す契機を与えてくれているように感じる。かつてドイツにおいて、劇場は近代化の 1 つの装置として市民社会と国民形成に重要な文化機関だった。権力が芸術文化と結びつくことには危険性が潜んでいることを充分に認識しつつ、私たちは、未来への展望を示し人々に働きかけ人々をつなぐ場として公共劇場の役割に期待し、また関わっていく必要がある。　(服部　記)